史跡栃本廃寺跡発掘調査報告書

2008. 3

鳥取市教育委員会

史跡栃本廃寺跡発掘調査報告書
二〇〇八
鳥取市教育委員会

史跡栃本廃寺跡主要伽藍全景（南東上空から）

巻頭図版 2

金堂、講堂全景（西真上から）

金堂、講堂全景（南から）

金堂、講堂全景（南東から）

巻頭図版 4

金堂～講堂間トレンチ土層断面（南西から）

平成19年度第１トレンチ東塔北土層断面（北西から）

史跡栃本廃寺跡発掘調査報告書

２００８．３

鳥取市教育委員会

序

鳥取市は平成16年11月に１市８町村と合併を行い、人口約20万人を擁する山陰最大の都市として大きく生まれ変わりました。その中でも国府地域は因幡国の国庁が置かれ、古代の中心地として繁栄してきました。

本書は史跡栃本廃寺跡の環境整備に伴って平成17年から平成19年に実施した発掘調査の記録です。

史跡栃本廃寺跡は昭和10年に国史跡に指定されましたが、田園の中に塔心礎が二石確認されているだけで、ほかの遺構等はまったく確認されていませんでした。しかし平成９年度から平成15年度にかけて行われた発掘調査により、新たに石積みの基壇を持つ金堂や講堂が確認され、また全国でも類例のない特異な伽藍配置を持つ寺院であることが判明しました。このため平成16年２月に寺域を含めた範囲の追加指定を行い、今後は市民に親しまれる史跡として環境整備を実施していきたいと思います。

最後になりましたが、調査の際にご指導・ご協力いただいた文化庁を始め諸先生方や関係者皆様に心から感謝を申し上げます。

平成20年３月

鳥取市教育委員会
教育長　中川俊隆

例　　言

1．本書は平成17～19年度にかけて国庫補助金及び県補助金を受けて実施した史跡栃本廃寺跡の発掘調査の記録である。
2．本調査は史跡栃本廃寺跡の史跡整備に伴って実施した発掘調査である。
3．発掘調査を実施した遺跡の所在地は、鳥取県鳥取市国府町栃本字塔ノ垣772番地である。
4．現地実測・写真撮影、遺構図面の浄書は、調査員を中心に発掘調査参加者の協力のもとに行い、出土遺物の整理及び実測・浄書・出土遺物観察表は、調査員の指示のもとに整理作業員を中心に行った。本書の執筆、編集は加川 崇、谷口恭子が担当した。
5．平成18年度に実施した航空撮影業務は（株）ワールドに委託した。
6．発掘調査によって作成された記録類および出土遺物は、鳥取市教育委員会に保管されている。
7．現地調査から報告書作成にいたるまで多くの方々からの指導、助言ならびにご協力をいただいた。厚く感謝いたします。

凡　　例

1．本書における方位、座標値は、第９図（磁北）を除き国土座標第Ｖ系（世界測地系）による。また、高さは海抜標高である。
2．今回の調査によって出土した遺物は、調査年度、遺跡名、遺構名、遺物台帳登録番号、取り上げ年月日を基本的に注記し、写真や図面などの記録類も同様である。
（例；2006栃本 講堂ＳＥ06.10.21 №134）

本　文　目　次

巻頭図版
序
例言
凡例
第１章　発掘調査の経緯
　第１節　発掘調査に至る経緯及び既往調査……1
　第２節　発掘調査の経過……2
　第３節　調査体制……3
第２章　栃本廃寺跡の位置と歴史的環境
　第１節　地理的環境……5
　第２節　歴史的環境……5
第３章　調査の結果
　第１節　平成17年度の調査……11
　第２節　平成18年度の調査
　　金堂……13
　　講堂……13
　　出土遺物……14
　第３節　平成19年度の調査
　　第１トレンチ（東塔）……23
　　第２トレンチ……24
　　第３トレンチ……24
　第４節　まとめ……30
　写真図版
　報告書抄録

挿　図　目　次

第１図　栃本廃寺跡周辺遺跡分布図……７・８
第２図　栃本廃寺跡調査トレンチ位置図……９・10
第３図　平成17年度調査出土遺物実測図……12
第４図　金堂実測図……15・16
第５図　講堂実測図……17・18
第６図　金堂、講堂土層断面図……19・20
第７図　平成18年度調査出土遺物実測図……21
第８図　平成19年度第１トレンチ実測図……25・26
第９図　平成19年度第２、３トレンチ実測図……27
第10図　平成19年度調査出土遺物実測図（１）……28
第11図　平成19年度調査出土遺物実測図（２）……29

図　版　目　次

巻頭図版１　史跡栃本廃寺跡主要伽藍全景（南東上空から）
巻頭図版２　金堂、講堂全景（西真上から）
巻頭図版３　金堂、講堂全景（南から）
　　金堂、講堂全景（南東から）
巻頭図版４　金堂～講堂間トレンチ土層断面（南西から）
　　平成19年度第１トレンチ東塔北土層断面（北西から）
図版１　平成17年度調査前（南東から）
　　平成17年度調査前（南から）
　　金堂南基壇石検出状況（南東から）
図版２　金堂既往調査トレンチ検出状況（東から）
　　講堂既往調査トレンチ検出状況（東から）
　　講堂身舎礎石検出状況（南東から）
図版３　講堂身舎礎石検出状況（東から）
　　金堂～講堂間トレンチ土層断面（南西から）
　　冬季積雪状況（南東から）
図版４　平成18年度調査前（南東から）
　　調査指導風景（西から）
　　調査整備委員会現地視察風景（北西から）
図版５　金堂全景（南真上から）
　　講堂全景（南真上から）
図版６　金堂南基壇、犬走り状石敷き検出状況（東から）
　　金堂東基壇、犬走り状石敷き検出状況（北から）
　　金堂北基壇、犬走り状石敷き検出状況（東から）
図版７　金堂西基壇、犬走り状石敷き検出状況（南西から）
　　金堂南基壇東側検出状況（南から）
　　金堂南基壇西側検出状況（南から）
図版８　講堂東基壇、犬走り状石敷き検出状況（南から）
　　講堂南基壇、犬走り状石敷き西側検出状況（南から）
　　講堂南基壇、犬走り状石敷き検出状況（西から）
図版９　講堂西基壇、犬走り状石敷き検出状況（南から）
　　講堂北辺溝状遺構検出状況（東から）
　　講堂北辺溝状遺構土層断面（東から）
図版10　金堂東西土層断面（南西から）
　　講堂東西南北土層断面（北東から）
　　講堂東西土層断面西端部分（北西から）
図版11　金堂～講堂間土層断面（北西から）
　　金堂～講堂間土層断面講堂南基壇部分（南西から）
　　金堂南東端深掘部土層断面（北から）
図版12　講堂Ｓ１検出状況（南から）
　　講堂Ｓ２検出状況（南から）
　　講堂Ｓ３検出状況（南から）
　　講堂Ｓ４検出状況（南から）
　　講堂Ｓ５検出状況（南から）
　　講堂Ｓ６検出状況（南東から）
　　講堂Ｓ７検出状況（南から）
　　講堂Ｓ８検出状況（南から）
図版13　講堂Ｓ９検出状況（南から）
　　講堂Ｓ10検出状況（南から）
　　講堂Ｓ11検出状況（南から）
　　講堂Ｓ12検出状況（南から）
　　講堂Ｓ13検出状況（南から）
　　講堂Ｓ14検出状況（南から）
　　講堂Ｓ15検出状況（東から）
　　講堂Ｓ17検出状況（南から）
図版14　講堂Ｓ19検出状況（南から）
　　講堂Ｓ20検出状況（北西から）
　　講堂Ｓ25検出状況（南から）
　　講堂Ｓ26検出状況（南から）
　　講堂Ｓ27検出状況（南から）
　　講堂Ｓ28検出状況（南から）
　　講堂Ｓ15礎石下遺物出土状況（東から）
　　講堂北辺整地層遺物出土状況（東から）
図版15　平成19年度第１トレンチ設定状況（北東から）
　　平成19年度第１トレンチ掘下げ状況(北東から）
　　平成19年度第１トレンチ掘下げ状況（西から）
図版16　平成19年度第１トレンチ西辺掘下げ状況（東から）
　　平成19年度第１トレンチ北辺掘下げ状況（南から）
　　平成19年度第１トレンチ西辺石検出状況（西から）
図版17　平成19年度第１トレンチ西辺南壁断面（北東から）
　　平成19年度第１トレンチ西辺北壁断面（南東から）
　　平成19年度第１トレンチ北辺東壁断面（南西から）
図版18　平成19年度第２トレンチ設定状況（南西から）
　　平成19年度第２トレンチ掘下げ状況(南西から）
　　平成19年度第２トレンチ東壁断面（南西から）
図版19　平成19年度第３トレンチ設定状況（北から）
　　平成19年度第３トレンチ掘下げ状況（北から）
　　平成19年度第３トレンチ東壁断面（西から）
図版20　平成17年度　金堂～講堂間出土遺物
　　平成17年度　講堂出土遺物
　　平成18年度　金堂出土遺物
　　平成18年度　講堂出土遺物
図版21　平成18年度　講堂出土遺物
　　平成19年度　第１トレンチ出土遺物
図版22　平成19年度　第１トレンチ出土遺物
　　平成19年度　第２トレンチ出土遺物

第１章　発掘調査の経緯

第１節　発掘調査に至る経緯及び既往調査

史跡栃本廃寺跡は鳥取県鳥取市国府町栃本字塔ノ垣に所在する古代寺院跡である。東西両塔の礎石を完全に遺し、また地籍図に金堂跡と考えられる地割があることからここに一大伽藍があり、県下の仏教文化の進展を物語る貴重な遺跡として昭和10年12月24日に『栃本廃寺塔跡』として3,066㎡が国の史跡に指定された。指定当初は田園の中に２石の塔心礎が露出しており、寺院があった痕跡を残すのみであったが、申請書によると『地籍図中ニハ四拾九番壱畝拾歩ノ畑地アリ此ノ土地ハ先年掘リ取ツテ低地ニ埋メ一窪ノ水田トセリト當時此ガ土工ニ當リシ人ニ聞クニ之ヲ開墾セシハ約三十四五年前（日露戦役前ニシテ高二尺位七八間四面ノ土壇アリテ其ノ土砂ト共ニ瓦片陶器片巨石等（二尺四方位ノ台座ニスレバ適當ナル石十二三アリシト）ヲ低地ニ埋メタリトノコトナリ)』とあることから1904年以前までは基壇と礎石が原位置を保っていたと考えられる。

国史跡に指定された後は郷土史家川上貞夫氏らの注目を集めるものの発掘調査が行われることもなく、長い間幻の古代寺院跡となっていた。

発掘調査の契機となったのは平成８年の中山間地総合整備事業（ほ場整備事業）である。この事業は指定地を含めた栃本地区の全域に渡って行われる計画となっていたため、開発部局と協議を行い、平成９年度から平成14年度まで年次的に発掘調査の計画を立てて栃本廃寺跡の範囲確認や中心伽藍の内容を解明するための発掘調査を実施した。

第１次調査（平成９年８月６日～平成10年３月19日　総事業費　3,011千円）

第１次調査は主要伽藍を確認することを目的として西塔及び金堂と考えられる場所を中心に９箇所のトレンチを設定し調査を実施した。調査面積は260㎡である。

西塔は基壇部分のほとんどが削平を受けていたものの、わずかな基壇土と掘り込み地業が確認されたことから塔の規模は10m四方と推定した。また当初西塔と考えられていた塔心礎は実は南塔の心礎であることが判明した。（今後は南塔と称する）金堂跡と考えられる場所からは犬走り状の石敷き遺構を確認し、また石敷きの上に並ぶ基壇石を確認した。このことから申請書に記載されている金堂の基壇を倒し水田を拡張したということが証明された。また金堂の北側に設定したトレンチから金堂と主軸を同じくする石列が確認できたことから講堂の存在を確認した。

第２次調査（平成10年４月３日～平成11年３月31日　総事業費　4,003千円）

第２次調査は第１次調査で確認した金堂・講堂の性格及び規模の確認と東塔心礎の周辺及び中門・寺域東端部の調査を目的として16箇所にトレンチを設定し調査を実施した。調査面積は500㎡である。

金堂上面はかなり削平を受けており、原位置を保っている礎石は確認できなかった。また第１次調査で確認した犬走り状の石敷き遺構と今回の調査で確認した礎石から基壇の規模は東西14.8m、南北12.4m、石敷き遺構幅1.2m、建物の規模は南面する５間×４間の建物を想定している。講堂は第１次調査で南辺及び東辺で石敷き遺構を検出したものの、第２次調査で実施した西辺及び北辺のトレンチでは石敷き遺構を確認することはできなかった。また原位置を保っている礎石３石と礎石の根石を確認し、基壇の規模は東西15.8m、南北13.0m、犬走り状遺構1.2m、建物の規模は南面する５間×４間の建物と推定した。寺域東端部は調査を実施したが明確な遺構を確認することはできなかった。また中門と想定される場所に設定したトレンチは表土除去のみにとどめ、次年度の調査に備えた。

第１・２次調査の結果、南塔・金堂・講堂が南北に配され、金堂の南と東に二塔が配される全国でも例のない特異な伽藍配置をしていることが判明し、一躍脚光を浴びることとなった。

第３次調査（平成11年４月14日～平成12年３月21日　総事業費　3,516千円）

第３次調査は中門及び寺域西端部の調査を中心にトレンチを設定し、部分的に講堂・南塔の補足調査

を実施した。調査面積は367㎡である。

中門があったと想定される場所に設定したトレンチはかなり撹乱を受けていたものの、一部で版築したような互層状の土層を確認している。寺域西端部の調査については西側に傾斜する段状の遺構を確認することができたことから、寺域の西端と推定した。

第４次調査（平成13年５月10日～平成14年３月20日　総事業費　2,510千円）

第４次調査は東西の寺域を確認するために３箇所にトレンチを設定し調査を実施した。調査面積は220㎡である。

寺域西端部では第３次調査と同様に西側に傾斜する段状の遺構を確認することができ、寺域の西端を確定した。寺域東端部では寺域を区画するような施設を確認することはできなかった。

第５次調査（平成14年５月２日～平成15年３月20日　総事業費　2,003千円）

第５次調査は第４次調査と同様に東西の寺域を確認するために５箇所のトレンチを設定し調査を実施した。調査面積は306.5㎡である。

寺域西端部は第３・４次調査同様に西側に傾斜する段状の遺構を確認することができた。寺域東端部は第２・４次調査では寺域を区画するような施設を確認することができなかったが、この調査で溝状の遺構を確認したことから寺域の東端部を確定した。

第６次調査（平成15年６月５日～平成16年３月19日　総事業費　1,001千円）

第６次調査では溝で区画された寺域東側の外側を確認するために１箇所にトレンチを設定し調査を実施した。調査面積は90㎡である。

調査の結果、大きな礫が混じり、かなり撹乱されたような状態であり、栃本廃寺跡に関連するような遺構を確認することはできなかった。

平成９年度から平成15年度にかけて実施した６次にわたる発掘調査によって、金堂・講堂の詳細、寺域が確定したことから、これまで指定していた範囲を拡大して指定（5,369.28㎡）することになった。申請は平成15年６月に文化庁に追加指定及び名称変更の申請を行い、平成15年11月21日に国の文化審議会から文部科学省に答申がなされ、平成16年２月27日に官報により告示が行われ、史跡栃本廃寺跡となった。指定面積は合計8,435.28㎡である。

金堂・講堂の遺存状況が良好だったことが確認された平成10年度には史跡公園構想が持ち上がり、16,649㎡がほ場整備範囲から除外され史跡整備のために保存されることになった。この構想の下に平成15年度に基本計画及び基本設計の策定を行い、史跡整備に向けて動き出した。

史跡整備範囲の用地取得は平成15年度に鳥取県東部町村土地開発公社が先行取得を行い、平成16年度に国府町が国庫補助を受けて用地を土地開発公社から買い戻すという方法で行われた。事業費は17,808千円（内補助事業分は9,325千円）である。

そして平成17年度からは史跡整備に向けて詳細な内容を把握するために３ヶ年にわたって金堂・講堂を中心に発掘調査を実施することとなった。

第２節　発掘調査の経過

第７次調査（平成17年６月１日～平成18年３月24日　総事業費　4,762千円）

第７次調査では金堂上面西側、講堂の上面を確認することを目的に調査を実施した。調査面積は640㎡である。

調査は基本的に人力で実施したが、表土除去については重機を使用した。金堂・講堂ともに南北軸を設定し、それに直交する形でベルトを設定した。調査は10月31日に表土を除去し、これまで確認調査が行われたトレンチ部分を慎重に掘り下げ、基壇及び礎石の位置を再確認した。また金堂・講堂西側にあった水田畦畔を除去し、当時の整地面を確認した。特に金堂は水田の畦畔を除去したことにより東西

の隅石が明瞭となり、南辺の基壇石が明確に観察できるようになった。講堂は上面すべてを掘り下げることはできなかったが、想定されていた礎石部分を確認したところ身舎の部分の礎石は原位置を保った状態で遺存していることが確認できた。12月以降は例年にない降雪となり、シート及び土嚢で養生を行い次年度の調査に備えた。出土遺物は須恵器、土師器が大半を占め僅かながら瓦質土器、陶磁器片が出土している。出土量はコンテナ１箱程度である。

第８次調査（平成18年８月18日～平成19年３月22日　総事業費　5,298千円）

第８次調査は金堂の南辺基壇及び前面、講堂の東半分及び北辺の遺存状況を確認する目的で調査を実施した。調査面積は186㎡である。

調査は９月７日から掘削作業に入り、講堂北辺部分の掘り下げを行った。講堂の北辺には基壇石は確認されず、溝状遺構で区画することが判明した。金堂の前面には後世に水路が築かれており、慎重に除去したところ犬走り状の石敷き遺構が良好に遺存していることが確認された。発掘調査終了後にはラジコンヘリコプターによる空撮を実施し、10月21日に現地説明会を開催し100名を超える参加者があった。発掘調査を実施した面がわかるようにシート及び土嚢による養生を行ったうえで重機及び人力による埋め戻しを実施した。出土遺物は須恵器片が大半を占め、僅かながら土師器、瓦質土器、陶磁器片が出土している。出土量はコンテナ１箱程度である。

第９次調査（平成19年６月１日～平成20年３月26日　総事業費　5,113千円）

第９次調査は東塔の基壇及び金堂と講堂の間の遺構面の確認及び講堂北西側、寺域南西側の確認を目的として調査を実施した。調査面積は53㎡である。

調査は８月９日から現地に入り、まず第７次調査時に設定した金堂のベルトの延長線上に金堂から東塔、東塔から東塔北側に向けてL字形にトレンチを設定し、掘り下げを実施した。東塔の基壇土は良好に遺存していることが確認でき、また東塔の基壇土を盛る際に置かれた可能性のある石を確認している。その他のトレンチでは明瞭な遺構を確認することができず、河原石が大量にあることから遺構面は削平されている可能性が高いと考えられる。調査終了後は掘削した面がわかるようにシートや土嚢袋を四隅等に入れて埋め戻しを行った。出土遺物は須恵器片、土師器片が出土している。出土量はコンテナ１箱程度である。

第３節　調査体制

平成９年度から平成15年度にかけて実施した発掘調査は国府町教育委員会が事業主体となって実施したが、平成16年11月に国府町を含む１市８町村によって市町村合併が行われ、史跡栃本廃寺跡の発掘調査及び整備についても新鳥取市へと引き継がれることとなった。このため平成17年度以降は鳥取市教育委員会が事業主体となって発掘調査及び史跡整備を実施している。また平成17年度以降の発掘調査及び整備は史跡栃本廃寺跡調査整備委員会を組織し、文化庁・奈良文化財研究所・鳥取県教育委員会事務局・鳥取県埋蔵文化財センターの指導・助言を仰ぎながら実施した。平成17年度以降の調査体制は以下の通りである。

第７次調査　平成17年度
　事業主体　鳥取市教育委員会
　　中川俊隆（鳥取市教育委員会教育長）
　調 査 員　津川ひとみ（鳥取市教育委員会事務局文化財課スタッフ）
　　谷口恭子（鳥取市埋蔵文化財センター主任）
　指導助言　清野孝之（文化庁文化財部記念物課文化財調査官）
　　史跡栃本廃寺跡調査整備委員会

山中敏史　委員長(奈良文化財研究所埋蔵文化財センター遺跡調査技術研究室　室長)
中島義晴（奈良文化財研究所文化遺産研究部遺跡研究室　文部技官）
川口英之（島根大学生物資源科学部森林環境学講座　助教授）
清水良彦（地元代表）
鳥取県教育委員会事務局文化課
鳥取県埋蔵文化財センター
調査事務　鳥取市教育委員会事務局文化財課

第８次調査　平成18年度
事業主体　鳥取市教育委員会
中川俊隆（鳥取市教育委員会教育長）
調 査 員　加川　崇（鳥取市教育委員会事務局文化財課主事）
谷口恭子（鳥取市埋蔵文化財センター主幹）
指導助言　白崎恵介（文化庁文化財部記念物課文化財調査官）
史跡栃本廃寺跡調査整備委員会
山中敏史　委員長（奈良文化財研究所文化遺産研究部遺跡整備研究室　室長）
中島義晴（奈良文化財研究所文化遺産研究部遺跡整備研究室　研究員）
川口英之（島根大学生物資源科学部森林環境学講座　助教授）
清水良彦（地元代表）
鳥取県教育委員会事務局文化課
鳥取県埋蔵文化財センター
調査事務　鳥取市教育委員会事務局文化財課

第９次調査　平成19年度
事業主体　鳥取市教育委員会
中川俊隆（鳥取市教育委員会教育長）
調 査 員　加川　崇（鳥取市教育委員会事務局文化財課主任）
谷口恭子（鳥取市埋蔵文化財センター主幹）
指導助言　小野健吉（文化庁文化財部記念物課　主任文化財調査官）
市原富士夫（文化庁文化財部記念物課　文化財調査官）
史跡栃本廃寺跡調査整備委員会
山中敏史　委員長（奈良文化財研究所文化遺産研究部遺跡整備研究室　室長）
平澤　毅（奈良文化財研究所文化遺産研究部遺跡整備研究室　主任研究員）
川口英之（島根大学生物資源科学部森林環境学講座　准教授）
清水良彦（地元代表）
赤木三郎
鳥取県教育委員会事務局文化課
鳥取県埋蔵文化財センター
調査事務　鳥取市教育委員会事務局文化財課

第２章　栃本廃寺跡の位置と歴史的環境

第１節　地理的環境

鳥取市は県東部に位置し、面積765.66㎢、人口20.1万人を擁する県庁所在地である。平成16年11月１日に周辺八町村を含めた広域合併を行い、北は日本海を臨み南は岡山県と県境をはさむ。

栃本廃寺跡は、鳥取市国府町（合併前の旧岩美郡国府町）の東部に位置する。国府町は鳥取県北東部に位置し、東西18㎞、南北７㎞と東西に長く総面積93.40㎢である。町の東端は兵庫県に接する。南東端は標高1,309.9ｍの扇ノ山、北東には河合谷高原が広がる。町の東西を貫流する袋川は扇ノ山を源とし、同じく同山を源とする大石川、上地川と合流して、町の中流域で神護川、町の下流域で高岡川、美歎川を合わせて時代とともに流路を幾度と変えながらも鳥取市街地へと注ぎ、最終的に千代川と合流する。袋川沿いを主要地方道鳥取国府岩美線が走る。町の西部では玉鉾から北西向きへ扇状地が発達してまとまった平野部が形成され、東部側山間地域は各河川沿いにわずかに平地が広がる。

栃本廃寺跡は国府町西部の平野部の町中心部から約14ｋｍ山間部に入った栃本地区に位置する。栃本は現在統合で廃校となってはいるが旧大茅小学校や農協、郵便局など各種機関が集中し、古くから大茅地区の中心として栄えた集落である。栃本廃寺はこの集落から東に約300ｍ東谷奥の、袋川支流の大石川と谷川が合流する手前に広がる段丘状の微高地に立地する。大石川は流長約６㎞を測り、現在は河川改修が行われ川沿いに県道が走る。河川改修以前は川幅が狭い上に水量が多く河川勾配が急なため豪雨のたびに周辺は大洪水に見舞われ、流路も幾度となく変わったと伝えられているが、栃本廃寺跡は大石川の氾濫の比較的影響の少ない山裾寄りの標高241ｍ前後に立地する。周辺は山深く約80％が山林を占め、険しい山々が連なって深いＶ字形の渓谷が多々あり、約３㎞北東に日本の滝百選に選ばれた雨滝が所在する。この周辺の地層は、普含寺泥炭層・鮮新世火山岩類・扇ノ山安山岩に大別される。普含寺泥炭層は緻密な粘土質から良好な動物化石が量、種類ともに多く輩出する地層として全国的にも知られた地層名である。今から3,000年～3,500万年前は栃本周辺は海であったことが窺える。鮮新世火山岩類は鳥取県のほぼ全域を占める層で、大山や扇ノ山等の火山噴出物によって不整合に覆われている。扇ノ山安山岩は兵庫県との県境となる扇ノ山と氷ノ山を中心として広がる安山岩を総称しており町内では最も新しい岩層である。

気候は日本海岸気候に属し、北西の季節風を受け、雨やみぞれ、雪が多く、晴天日数が少ない。国府町でも西の平野部と東の山間部とでは気温差が認められる。栃本周辺は山々に囲まれていることから日照時間も少なく、冬季の積雪は２ｍを超え４月に入っても積雪がみられる年もある。しかしながら栃本廃寺跡の立地する段丘状の微高地は南西面で日当たりは良好であり、平野が少なく居住域が比較的限定される中、条件の良い場所を選地して造営されたことが窺える。

第２節　歴史的環境

国府町内には、現在のところ、530箇所余りの遺跡が確認されている。

【縄文時代】　国府町で縄文時代の遺跡として、因幡国庁跡、栃本廃寺跡から出土した縄文土器片、清水地内で石棒片が出土している。縄文時代は遺物が断片的に認められる程度であり、次の弥生時代の到来を待つことになる。鳥取市内には低湿地の縄文遺跡として桂見、布勢遺跡、福部町栗谷遺跡が有名であるが、山間部の縄文遺跡としては中国山地山間部に位置する智頭町智頭枕田遺跡が全国的に有名である。平成14年、早期および中期末から後期初頭の竪穴住居多数が発見され、内６棟に石囲埋甕炉が遺存するなど10万点を越す土器・石器などを含め、西日本最大級の縄文集落として注目されている。

【弥生時代】　国府町で弥生時代の遺跡と言えば中期の安田遺跡がその代表であり、今のところ前期に遡る遺跡は発見されていない。安田遺跡は旧河川の自然堤防上に立地し、昭和52(1977)年に圃場整備

に伴い発掘調査が行われている。竪穴住居、貯蔵穴とともに弥生時代中期の壺、甕、高杯、磨製石斧や石庖丁などが出土している。また同様に自然堤防上に立地し中期のまとまった土器を出土した庁八反田所在遺跡がある。弥生時代後期の遺跡は、ローム層を基盤とする微高地である国分寺・法花寺地域に集中し、法花寺寺田遺跡で後期中葉のまとまった土器や国分寺遺跡などでも遺物が出土している。墳墓としては、四隅突出型墳丘墓として弥生時代後期終末の糸谷１号墳が有名であるが、近年、発掘調査から岡益43号墳は後期中葉の墳丘墓である可能性が指摘されている。

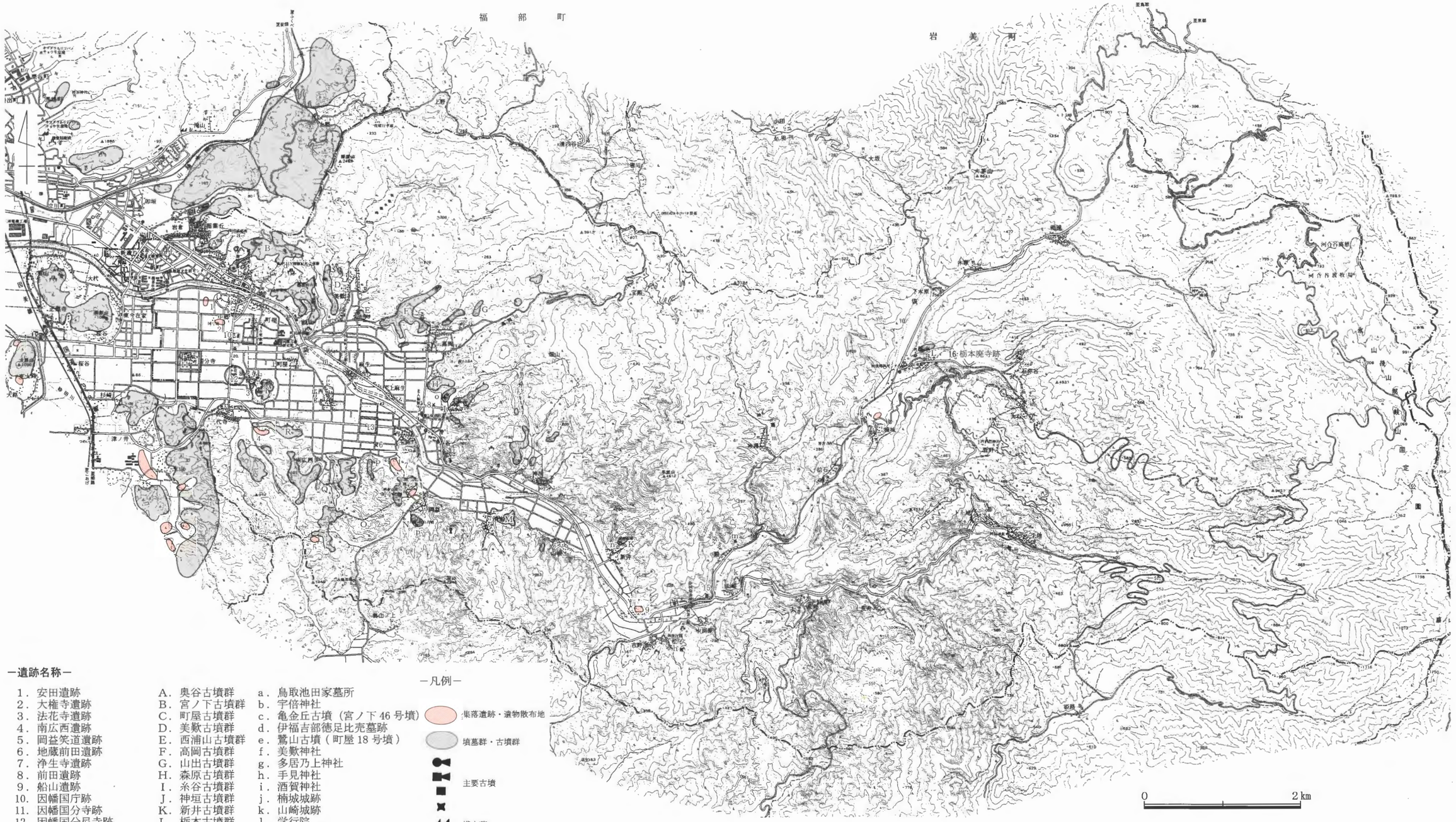
【古墳時代】　古墳時代に入って、前述の糸谷古墳群が引き続き築造され、竪穴式石室から銅鏡、鉄剣、鉄鏃、管玉などが出土した亀金丘古墳(宮ノ下46号墳)、筒形銅器が出土した西浦山古墳などが前期古墳として挙げられる。この他にも袋川両岸の平野を望む丘陵上に大小様々な古墳が築造されるようになる。奥谷古墳群、宮ノ下古墳群、町屋古墳群、美歎古墳群、高岡古墳群、西浦山古墳群、山出古墳群、森原古墳群、糸谷古墳群が右岸に位置し、左岸に今木山古墳群、三代寺古墳群、南広西古墳群、広西古墳群、岡益古墳群、清水古墳群、梶山古墳群、梶山横穴群が展開する。また袋川中、上流域の丘陵にも、神垣古墳群、新井古墳群、６世紀後半頃とされ線刻のある横穴式石室が確認されている栃本古墳群などがあり、袋川奥部まで古墳の分布が確認されている。このうち後期から終末期にかけて特色のある古墳が数多く築造され、魚や船の線刻壁画のある鷺山古墳(町屋18号墳)、変形八角形墳で切石石室の奥壁に魚などの彩色壁画が描かれた梶山古墳がその代表である。この他にも家形石棺をもつ石舟古墳(新井２号墳)、神垣３号墳、切石造りの神垣２号墳などがある。

【歴史時代】　律令体制下、国府町は因幡国法美郡稲羽郷、広西郷、罵城郷、大草郷に組み込まれる。国府町はその名のとおり因幡国衙が置かれた地であり、当時の政治、経済、文化の中心として重要な位置を占めていた地域である。因幡国庁の調査は昭和47(1972)年から行われ、国庁の中心施設が確認されている。その他に室町末期に至る屋敷地跡や輸入陶磁器などの生活具の出土からその後も何らかの形で機能していたことが判明している。また、町内には多くの寺院跡が分布し、白鳳期の創建として、等ヶ坪廃寺、岡益廃寺、栃本廃寺、奈良時代の国分寺、国分尼寺、平安時代初期の源門寺廃寺が知られている。また、岡益には特殊な石造物として名高い岡益石堂がある。伊福吉部徳足比売墓跡からは青銅製骨臓器が出土し、因幡の有力な豪族の娘である徳足比売は骨臓器の刻銘から、文武天皇の采女として仕え和銅元(708)年に死去後同３年に火葬されたことが記されている。

なお、因幡から但馬国、山陰道へ通じる重要な交通路として、鳥取城下から袋川沿いに大茅北東の十王峠を経て岩井郡蒲生村へ至る法美往来が栃本廃寺近くを通る。途中、宮下と楠城に宿駅があり、宮下からは私都往来へ分岐して私都谷へ至る。栃本廃寺の南の菅山には酒賀神社が祀られ、『三大実録』貞観３(861)年に従五位下に叙された記述があり、大草郡の一ノ宮として信仰は厚い。また雨滝は古くから修験道の霊場として栄えたとされる。法美郡の銅の生産地も近くに推定されている。

また、法美往来には袋川上流域に中世の城跡が多く残る。戦国時代には織田氏の後盾により因幡に侵入した山中幸盛は甑山に拠点を構えたが、天正９(1581)年には鳥取城主宮部氏の支配下に入った。

引用・主要参考文献
国府町教育委員会『史跡栃本廃寺塔跡発掘調査報告書』2000年
国府町教育委員会『史跡栃本廃寺塔跡Ⅱ・鳥取藩主池田家墓所』2003年
鳥取県埋蔵文化財センター『岡益廃寺』2000年
国府町『改訂国府町誌』2004年
平凡社『日本歴史地名大系第32巻　鳥取県の地名』1992年
久保穣二朗「弥生時代の集落立地について」『鳥取県立博物館研究報告第27号』1990年



ー遺跡名称ー

1. 安田遺跡
2. 大権寺遺跡
3. 法花寺遺跡
4. 南広西遺跡
5. 岡益笑道遺跡
6. 地蔵前田遺跡
7. 浄生寺遺跡
8. 前田遺跡
9. 船山遺跡
10. 因幡国庁跡
11. 因幡国分寺跡
12. 因幡国分尼寺跡
13. 等ヶ坪廃寺跡
14. 岡益廃寺跡・岡益石堂
15. 源門寺廃寺跡
16. **栃本廃寺跡**

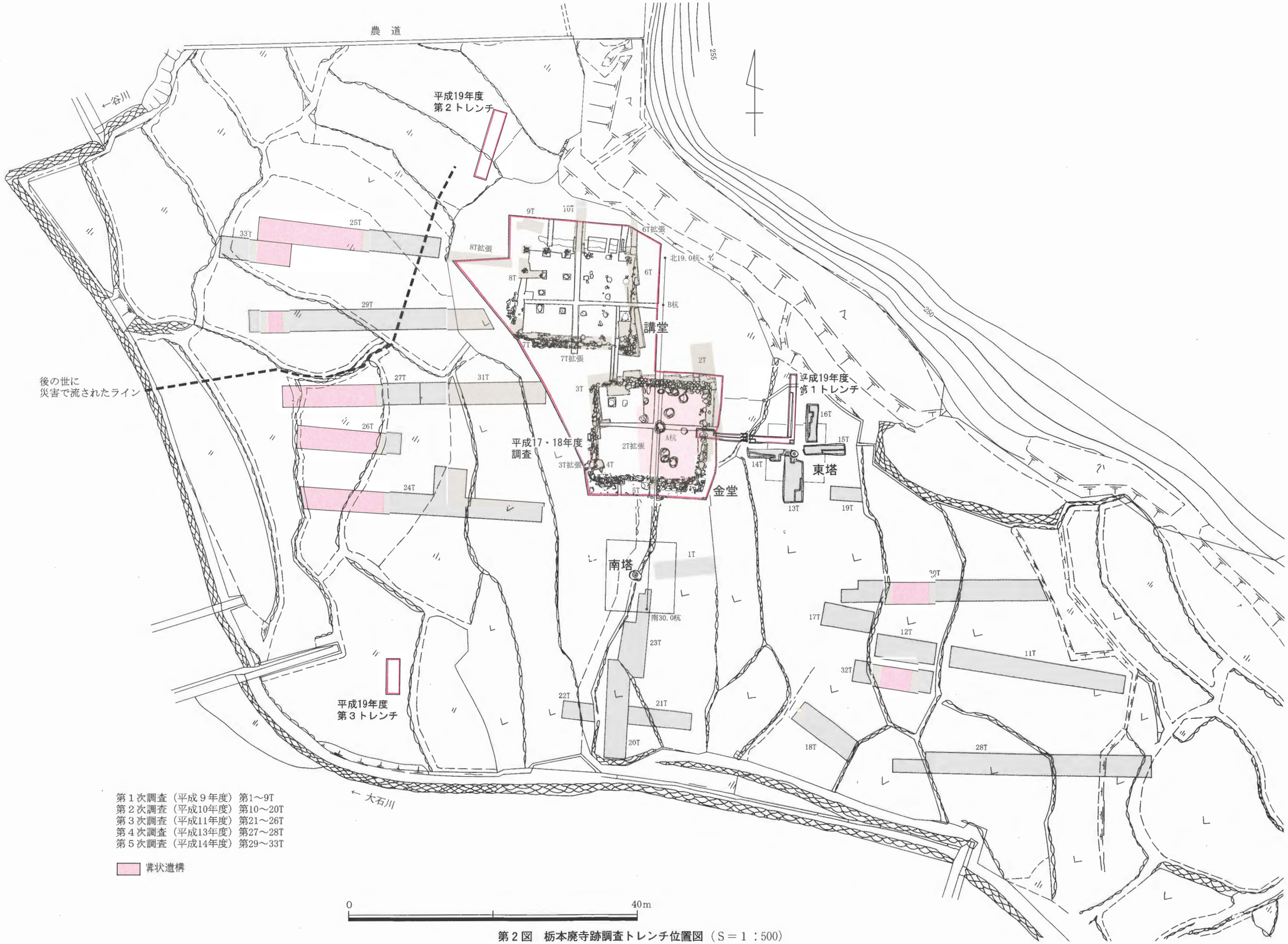
A. 奥谷古墳群
B. 宮ノ下古墳群
C. 町屋古墳群
D. 美歎古墳群
E. 西浦山古墳群
F. 高岡古墳群
G. 山出古墳群
H. 森原古墳群
I. 糸谷古墳群
J. 神垣古墳群
K. 新井古墳群
L. 栃本古墳群
M. 清水古墳群
N. 梶山古墳群
O. 岡益古墳群
P. 玉鉾古墳群
Q. 広西古墳群
R. 南広西古墳群
S. 三代寺古墳群
T. 今木山古墳群

a. 鳥取池田家墓所
b. 宇倍神社
c. 亀金丘古墳（宮ノ下46号墳）
d. 伊福吉部徳足比売墓跡
e. 鷲山古墳（町屋18号墳）
f. 美歎神社
g. 多居乃上神社
h. 手見神社
i. 酒賀神社
j. 楠城城跡
k. 山崎城跡
l. 学行院
m. 殿1号墳
n. 石舟古墳（新井2号墳）
o. 糸谷1号墳
p. 梶山古墳（梶山1号墳）

ー凡例ー

集落遺跡・遺物散布地
墳墓群・古墳群
主要古墳
横穴墓
城跡

第1図　栃本廃寺跡周辺遺跡分布図（S＝1：50,000）



第２図　栃本廃寺跡調査トレンチ位置図（S＝１：500）

第３章　調査の結果

第１節　平成17年度の調査（第２・３図、図版１～３・20）

平成17年度の調査は、埋め戻された金堂および講堂の既往調査トレンチの検出と、検出遺構の遺存状況の確認を主眼として行われた。まず、各年度にまたがって調査されたトレンチ位置を確認するために、基準となる測量杭の設定を行った。伽藍の中軸ラインを復元し、そのライン上(北19.0杭－南30.0杭)に金堂の中心杭Ａ杭と講堂の中心杭Ｃ杭を設けるためのＢ杭を設定した。Ａ杭は北19.0杭から南へ23.5m、南塔南の南30.0杭から北へ25.5mにあたる。Ａ杭から中軸ラインに直交するラインを設け、西10mにＡＷ杭、東９mにＡＥ杭を設けた。講堂はＢ杭から中軸ラインに直交するライン上に講堂の中心杭Ｃ杭、さらにそのラインに直交するＣＮ杭、ＣＳ杭を設定した。調査前の金堂および講堂の標高は金堂が標高241.6m、講堂が241.5mを測る。

調査は、設定した杭を用いて十字に土層観察用ベルトを残し、金堂と講堂の厚さ20cm前後の表土および耕作土を除去することから始まった。また、途中、金堂と講堂の層序の連続性を観察するため新たにＣ－Ｃ'ベルトを設定した。耕作土を除いて精査すると、既往調査トレンチの輪郭が検出され、金堂東側では平成９年度第２トレンチ拡張で倒れた基壇石や犬走り状石敷き、礎石などがシートで養生された状態で検出された。シートはやや劣化がすすむものの比較的良好な状態であった。また、講堂では平成９年度第６～８トレンチ、第７トレンチ拡張、第10トレンチの輪郭が検出された。金堂および講堂の検出したトレンチの輪郭の図面実測後、トレンチ埋め戻し土の除去を行った。

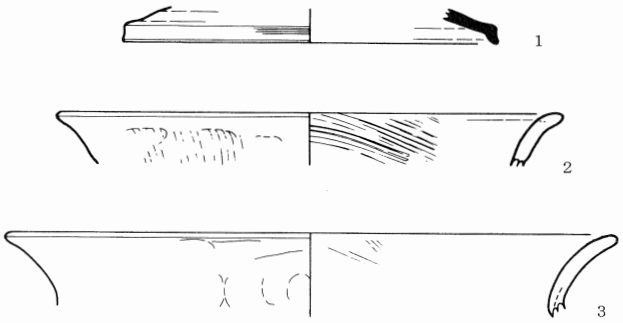
その後、金堂および講堂の西側に後世に構築された南東－北西方向に350mにわたる水田の石垣について、金堂と講堂の西側地盤の確認と金堂、講堂との高低差や遺構の連続性が視覚的に観察できるよう、石垣と石垣東側の水田造成土の除去を行うこととし、金堂および講堂東西土層ベルトの延長上にトレンチを掘り下げて下層の状況を確認後、それぞれ除去を行った。加えて金堂南東に北東方向に構築された用水路の石組みについても、金堂南基壇石周辺の蔓や低木の伐採・清掃後に同じく除去を行った。

金堂西側の水田造成土内には非常に多くの石が含まれ、元々は基壇石に用いられたであろう人力では移動困難な巨石も多々みられた。整備に活用される可能性も考慮に入れ、検出された石はまとめて仮置きした。金堂、講堂西側では遺構面とみられる地盤の近くまで締まりの弱いオリーブ灰色かかった粘質土が認められ、平坦地造成は比較的新しい時期に一気に成されたものと考えられる。遺構面上位20cm以下は注意深く手掘りし、その際土師器片など土器細片数点が出土している。金堂西側の標高240.4m弱で第９層の沈着に似た褐色の強い沈着面があり、講堂西側では標高240.6m前後に同様面が観察されるが、金堂、講堂から離れていくほどにその層は薄くなる傾向がある。特に講堂北西側は拳～人頭大の河原石が露出し、講堂ＣＷ杭周辺以北で沈着面は検出されなかった。

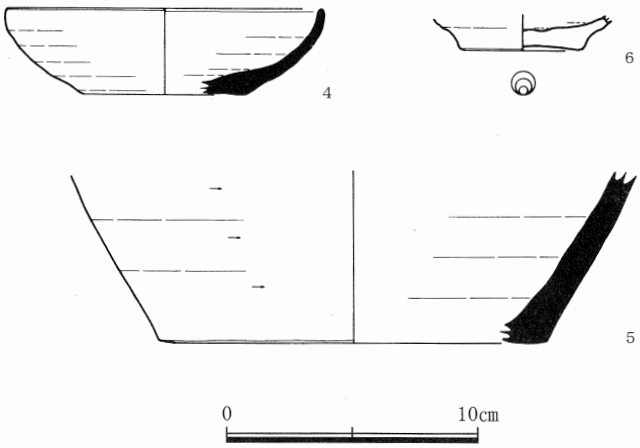
平成17年度調査の大きな成果の一つに講堂礎石の検出がある。身舎の礎石(Ｓ１～10)のＳ１については平成10年度第８トレンチ拡張で検出されていたが、残りの礎石についても講堂の復元プランを元に、トレンチ掘りによって検出を行った。結果、身舎とされる内列の礎石は良好な状態での完存が判明した。その後、講堂北東部については礎石面まで掘り下げを行い、講堂北辺については基壇石や犬走り状石敷きの有無の確認を行ったが調査範囲内には該当する遺構はみられず、根石列を検出した。

出土した遺物は主に耕作土中と既往調査トレンチ埋め戻し土中、水田造成土中から出土したもので、そのほとんどが須恵器あるいは土師器細片である。総量としてはコンテナ(容量54×34×20cm)約１箱分である。その中で比較的遺存の良い(１)～(６)について図化を行った。(１)～(３)は金堂～講堂間出土遺物で、(１)は金堂～講堂間トレンチＣ－Ｃ'の第９層中、(２)は講堂ＣＳ杭南の沈着面上層、(３)は水田造成土中の出土である。(４)～(６)は講堂出土遺物で、(４)は平成９年度第６トレンチ内、(５)は講堂西基壇外の沈着面上層、(６)は講堂北辺西側の第９層上層で出土した遺物である。この他に図化し

ていないものの、金堂南東部耕作土下から輪状つまみの須恵器杯蓋片や金堂～講堂間水田造成土中から縄文土器片１点、表土～第３層床土間で陶磁器細片数点が出土している。杯蓋（１）は口縁端部はやや外方へ屈曲し丸く納める。土師器く字形甕の口縁部（２）（３）は、第10図（７）～（９）と比較して大きく外反して延びる口縁形態ではなくやや小ぶりの甕とみられる。杯（４）は体部内湾し口縁は直立して丸く終える。底部（５）は直線的に外方へ立ち上がり、底体部ヘラ削り後ナデ調整される。土師器底部（６）は底部糸切りで外周部ヨコナデが観察される。



金堂～講堂間出土遺物



講堂出土遺物

第３図　平成17年度調査出土遺物実測図（Ｓ＝１：３）

平成17年度調査　出土遺物観察表

（　）復元値　〈　〉推定値

挿図番号	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	形態・手法の特徴	胎土	焼成	色調	残存状況	備考	遺物登録番号
1	杯蓋	〈14.7〉	－	－	口縁部で屈曲、端部は下外方に丸くおさめる。	0.5㎜前後の砂粒多い	良好	灰色	（口）1/9		48
2	土師器甕	〈19.8〉	－	－	外反する頸部は口縁端部で丸い。内外ハケ目調整後口縁端部軽い横ナデ。	0.5㎜前後の砂粒多い	良	黄橙色 橙色	（口）1/10		50
3	土師器甕	〈23.7〉	－	－	頸部外反、口縁端部は丸い。頸部横位のナデ。	1～2㎜大の砂粒有	良	(内)淡橙褐色 (外)暗褐色	（口）1/16	黒斑有 煤付着	50
4	杯	〈12.4〉	(6.3)	3.4	内湾する体部は口縁部で上方に丸くおさめる。	精緻	良好	灰色	(口)一部 (底) 1/6		45
5	(底部)	－	〈15.3〉	－	体部ヘラ削り後上位へのナデ調整。底部外面ナデ。	1㎜前後の砂粒を多く含む	良好	灰色	(底)1/12		39
6	土師器(底部)	－	4.5	－	底部回転糸切り後外周部軽いヨコナデ。	0.5㎜以下の砂粒有	良好	橙褐色	（底） 1		31

第２節 平成18年度の調査（第２・４～７図、巻頭図版１～４、図版４～14・20・21）

平成18年度は、階段の確認を含めた金堂南基壇周辺の精査、金堂と講堂間サブトレンチの精査、金堂および講堂の土層断面の調査、講堂北辺の調査区拡張により北基壇と犬走り状石敷きの有無の確認、講堂東側半面の掘り下げによる礎石・基壇の検出、各所の記録図化を行った。

金堂

金堂は、南基壇石の南側２ｍについて表土および耕作土の除去を行った。中軸から東側については、基壇石前面に後世に構築された用水路の石組みが現れ、注意深くそれらを除去していった結果、約1.1ｍ幅の犬走り状石敷きを検出した。また、南東隅と西隣の二石の基壇石についてはともに二段積みの遺存が確認された。中軸から西側は表土下10㎝弱程度で床土下に第９層が広がるとともに基壇石基底部が露出するなど全体的に削平がすすんでおり、犬走り状石敷きは検出されなかった。また、西寄りの基壇については後世に基壇石が前面に倒されてさらにその上に石積みがなされていることが明らかとなったが、南西隅の基底部基壇石についてはほぼ原位置を保っている可能性があると思われる。元々基壇石基底部は東から西へかけて徐々に標高を下げるつくりとなっており、基壇石基底部は南東隅で240.97ｍ、南西隅で240.66ｍと現状では約30㎝程度の比高差が認められる。金堂の基壇規模は東西14.6ｍ、南北13.0ｍである。なお、中軸付近に想定される階段状の遺構については、土層ベルトを設定していることもあり明確なものは確認できなかった。この他に、金堂北西部でこれまでに確認されていない礎石２点（Ｓ１、Ｓ２）を検出している。礎石周囲の撹乱穴の有無などは未確認であるが、現状では両石とも平坦面を上面としており、Ｓ１が標高241.42ｍ、Ｓ２が241.49ｍを測る。

講堂

講堂は、昨年度検出した北辺根石の北側を３ｍ拡張して該当する地盤まで掘り下げを行った結果、北基壇石と犬走り状石敷きは設けず、かわりに北辺に平行な溝状遺構で区画されていることが判明した。現況で幅1.2ｍ、遺存長12.1ｍ、深さ17㎝を測る。溝断面は椀状、埋土は灰黄褐色シルトである。北西端では南西隅Ｓ11東手前で集結しているが周辺は河原石が露出する地盤であり、以西については明確にできなかった。東端についても平成９年度第６トレンチ掘削により不明となる。裳階礎石とされる外列礎石および根石の中心部から約１ｍで溝状遺構の肩となり、南側東西外列の礎石と基壇石の関係もこれより短いもののほぼ同様の距離であることから、この溝状遺構によって講堂の区画および段差を保っていたと考えられ、山裾まで数ｍに迫ることなどから雨水などの処理機能も果たしていたと考えられる。なお、講堂北西トレンチ断面ｂ－ｂ'（第６図）から溝状遺構の基盤層は須恵器細片を含む第16層であり、ａ-ａ'断面の第18層の存在からも、講堂背後についても整地された地盤であったとみられる。溝状遺構の検出によって基壇の南北規模が明らかとなり、東西規模についても西辺に一部横積みの基壇石と考えられる石の並びが検出されたことで明確となった。講堂基壇規模は東西16.4ｍ、南北13.0ｍを測る。講堂基壇石は縦積みと横積みが認められ、南基壇は西側を中心に２段、一部３段に横積みされた箇所が確認され、南側基壇の東側および東側基壇においては縦位１段で基壇石を並べている。使用した石材のサイズや北東からの傾斜地形に起因するがゆえの相違であろうと思われる。

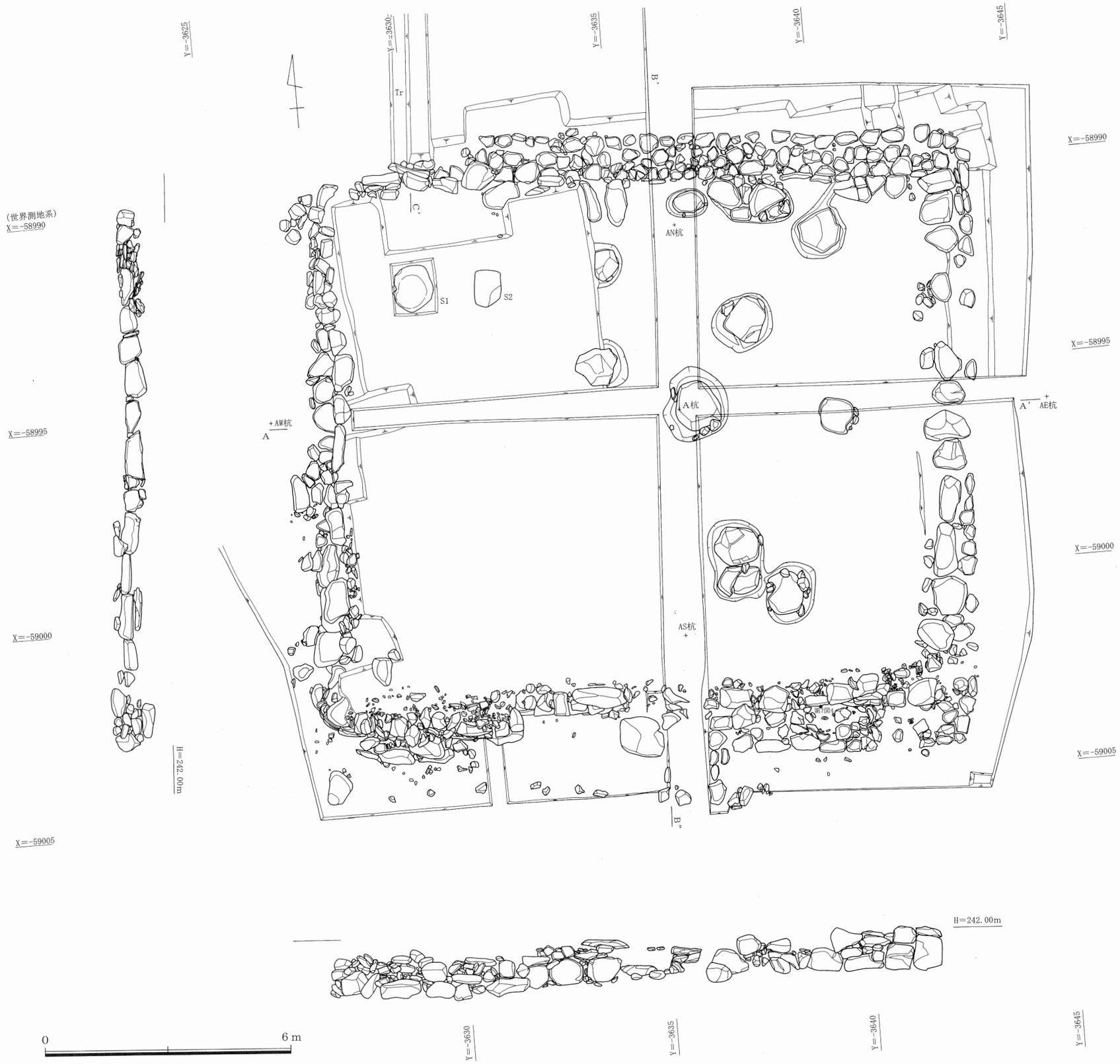
講堂西側半面については17年度にトレンチ掘りによって検出した講堂礎石の設置状況と基壇土の遺構確認のため、第３層床土下から第９層上面にかけて掘り下げを行った。その結果、内列の礎石と外列の礎石間には当初復元プランに示されていたような中列は検出されず、新たにＳ21やＳ17およびＳ19の根石痕跡を検出したことで、Ｓ18を除いた講堂建物礎石・根石の所在を確認することができた。この他に、Ｓ３周囲やＳ４とＳ５の間、Ｓ６とＳ21間などで小規模な石が点在するほか遺構のような痕跡はみられなかった。検出された内列の礎石（Ｓ１～Ｓ10）は東西が３間で9.15ｍ、南北が２間で4.8ｍを測る。柱間寸法は南北はそれぞれ2.40ｍであるのに対し、東西では3.15ｍ、2.85ｍ、3.15ｍと中央部側が狭くなる。外列は、東西５間で14.0ｍ、南北４間で11.2ｍを測る。柱間寸法は東西はそれぞれ2.8ｍのほぼ等間

隔、南北についても2.8mのほぼ等間隔とみられる。

土層断面からは、今回金堂および講堂の基壇の断ち割り調査は行っておらず、具体的な造営方法や明確な基壇の高さなどは不明である。金堂と講堂間に設定したトレンチ断面C－C'からは、第7層が犬走り状石敷きを敷設した層であり、そうなれば第9層が当時の遺構面となる。金堂側では断面に倒された基壇石がかかることからもほぼ金堂と講堂の犬走り状石敷きのレベルに比高差はほとんど認められない。講堂が金堂より軸をやや東へ振り出土遺物もやや時期差が認められるところではあるが、土層断面からは積極的な時期差は捉え難い。

出土遺物

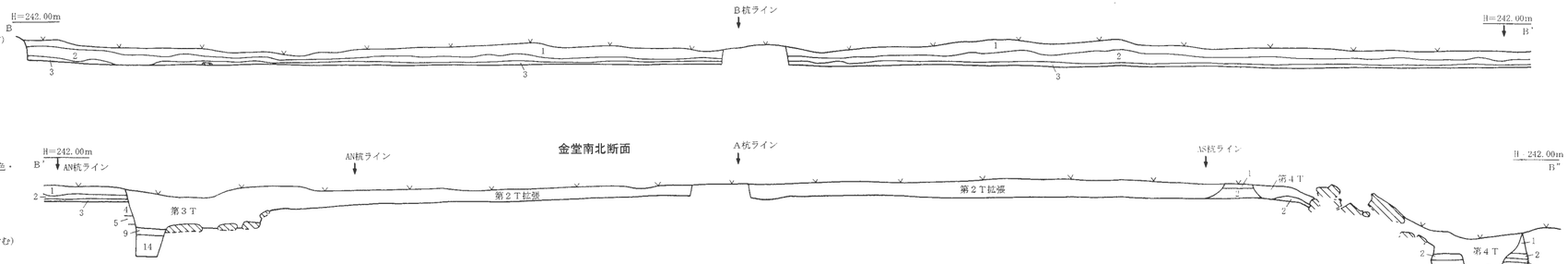
遺物は、金堂犬走り状石敷き検出時、講堂北辺拡張部掘り下げ時、講堂礎石および根石検出時の際出土した遺物が中心となる。総量としてはコンテナ（容量54×34×20cm）約1箱分である。その中で比較的遺存の良い(1)～(16)について図化を行った。(1)～(5)は金堂出土で、(6)～(16)は講堂出土遺物である。図化を行った以外に、金堂南西部第3層床土で縄文土器片1点、表土～第3層床土間で陶磁器細片数点が出土している。(1)は南西基壇石外側の耕作土～床土、(2)は金堂北東部犬走り状石敷き間、(3)～(5)は金堂南東部犬走り状石敷き間、(6)は講堂S17根石間、(7)はS19北西の根石痕跡検出面、(8)(11)(12)は北西拡張部根石検出面である第16層上面、(9)はS12の根石間、(10)はS13の根石間、(13)はS15の礎石根石間（図版14右3段目）、(14)は溝状遺構の南東側整地層(図版9下・14右下)、(15)は溝状遺構東側周辺第9層上面、(16)は講堂北東部第3層床土下の出土である。杯蓋(1)～(3)は、平坦でつまみ部が大きい(1)の他、かえりをもつ(2)、かえりがなく径の大きい(3)と各種ある。壺口縁部(4)は肉厚で口縁端部は内傾する面をもつ。鉢(5)は径20cmを測り口縁部上端は上方向へつまみ内傾する端面をもつ。講堂で出土した(13)に比較し体部内湾度がゆるい。講堂で出土した杯蓋(6)・(7)は、口縁端部の形態にやや差が認められ、(6)は端部はて字状を呈するが(7)は屈曲が鈍く丸く終える。天井外面ヘラ削りのち外周部ナデ調整でつまみ貼り付けの痕跡が観察される。杯(8)～(10)は底部糸切りで焼きが甘く灰白色系の色調である。(8)は底部から内湾気味に立ち上がり口縁部は外反してやや外方へ伸びる。高台部(11)(12)は(11)は糸切り後短い高台部がハ字状に貼り付くが、(12)は底外縁部に直立する高台である。鉢(13)は口縁上位で強く湾曲し口縁端部は内傾する端面をもつ。平瓶(14)は肩部に円盤充填痕があり、口縁端部は細く上位に先細る。土師器高台部(15)は底部糸切り後やや粗雑なつくりの高台をハ字状に貼り付けるがナデが不十分で剥離する。土師器甕(16)は口縁上位のわずかな遺存であるが端部は丸く納め外面に指押さえの痕跡が観察される。

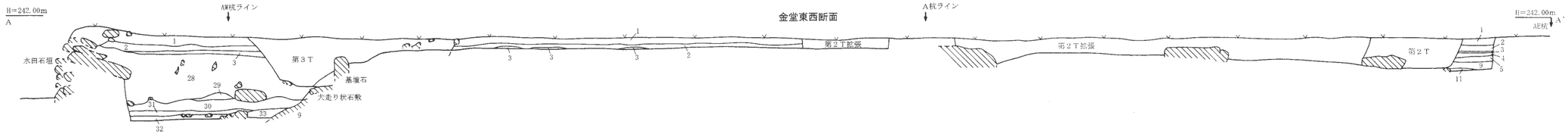


第4図　金堂実測図（S＝1：100）

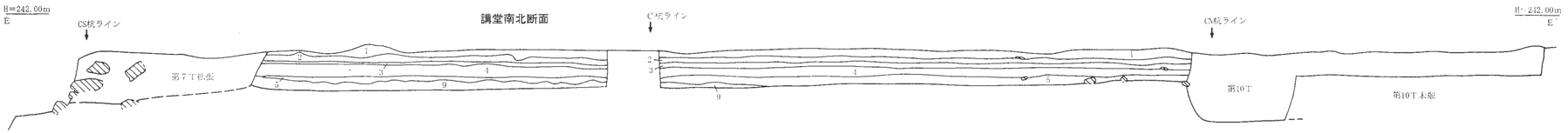
第5図　講堂実測図（S＝1：100）

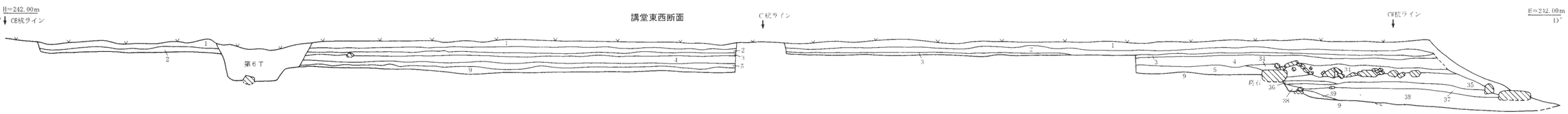
1. 灰黄褐色粘質土10YR4/2（表土。2より褐色かかる。締まり弱い）
2. 褐灰色粘質土10YR4/1（耕作土。1より灰色かかり締まる）
3. 黄褐色粘質土10YR5/8（床土。明褐色かかる）
4. 灰褐色粘質土7.5YR4/1（2より明褐色かかる。3cm大の礫を僅かに含む。帯状に明褐色の沈着有）
5. 灰褐色粘質土7.5YR4/2～3/2
6. 褐灰色粘質土7.5YR4/1（5より灰色かかる）
7. 褐灰色粘質土7.5YR4/1～4/2（6より褐色かかる）
8. 褐色粘質シルト7.5YR4/3（8cm大の礫有）
9. 暗褐色粘質土7.5YR4/3～4/4（鉄分・マンガンの強い沈着有）
10. 灰褐色粘質土7.5YR4/2（5よりシルト質。1mm大の細砂を含む）
11. 褐色粘質シルト7.5YR4/6（上面に暗褐色の沈着有）
12. 褐色シルト7.5YR4/4（礫の含みなし。やや粘質）
13. 褐色粘質シルト7.5YR4/4（1～5cm大の礫を多く含む）
14. にぶい黄褐色シルト10YR5/4～4/4（1～3mm大の砂質土。やや黄色かかる）
15. 灰黄褐色シルト10YR4/2～3/2（溝状遺構。炭片を僅かに含む。1～10cm大の礫を若干含む）
16. にぶい黄褐色粘質土10YR4/3～3/3（15より若干暗。2～20cm大の礫を多く含む。上部ほど黄褐色・明褐色の沈着著しい）
17. にぶい黄褐色シルト10YR4/3～3/3（礫の含みなし。砂質）
18. にぶい褐色粘質土7.5YR5/4（明褐色土を含む。0.5～5cm大の礫を含む）
19. 褐色粘質土10YR4/4～3/4（僅かに0.3～1cm大の礫を含む）
20. 褐色粘質土10YR4/4（19より明で締まる。明褐色土を若干含む）
21. 褐色粘質土7.5YR4/4（20より明で締まる。明褐色土を含む）
22. 暗褐色粘質土10YR3/3（19より暗で締まり弱い。灰色かかる。1cm大の褐色土ブロックを若干含む）
23. 黒褐色粘質土10YR3/2（22より暗で粘質。1～3cm大の褐色土ブロックを若干含む）
24. 暗褐色粘質土10YR3/3（締まる）
25. 明褐色粘質土7.5YR5/6（0.5～10cm大の礫を多く含む。締まる）

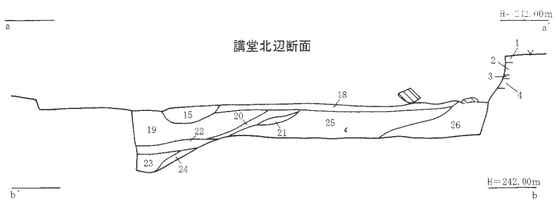


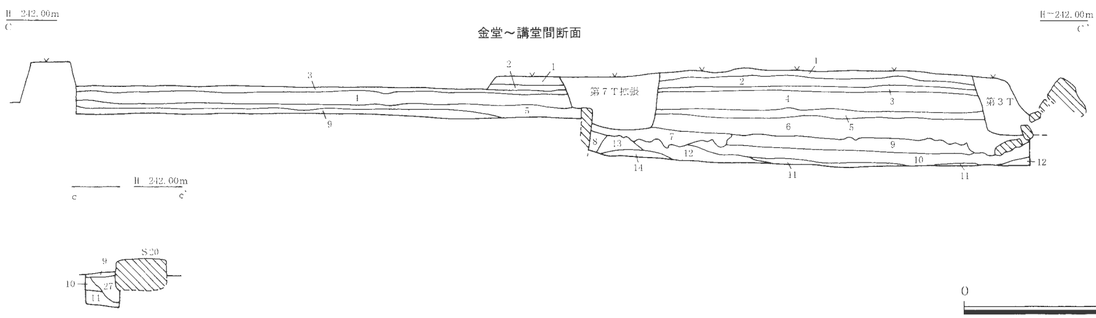


26. 褐色粘質土7.5YR4/6（岩盤。5～30cm大の礫層）
27. 暗褐色粘質土10YR3/4（10より暗。褐色シルトを含む。1～3mm大の砂礫を含む）
28. 褐色粘質土7.5YR4/4（耕作土。5～40cm大の礫を含む。締まり弱い）
29. 暗褐色粘質土7.5YR3/4（黄褐色の沈着有。締まり弱い）
30. 褐灰色粘質土10YR4/1（僅かに明褐色の沈着有。締まり弱い）
31. にぶい黄褐色粘質土10YR4/3（一部に明褐色の沈着有。締まり弱い）
32. 灰黄褐色粘質土10YR4/2（3～8cm大の礫を多く含む）
33. 灰黄褐色粘質シルト10YR4/2（32より砂質）
34. 黒褐色粘質土7.5YR3/2（1cm大の明褐色・黒色土ブロックを含む。3～30cm大の礫を含む。締まり弱い）
35. 褐灰色粘質シルト10YR4/1（僅かに黄褐色の沈着有。締まる。灰色かかり湿じった土）
36. 灰黄褐色粘質土10YR4/2（35より黄褐色かかり沈着強い）
37. 褐色粘質土7.5YR4/3～10YR4/3（締まる。薄く黄褐色の沈着有）
38. 褐色粘質土10YR3/4～3/3（37より暗で褐色強い。締まる）
39. 黄褐色礫層10YR5/6（2～10cm大の地山礫を多く含む。この下に沈着層）



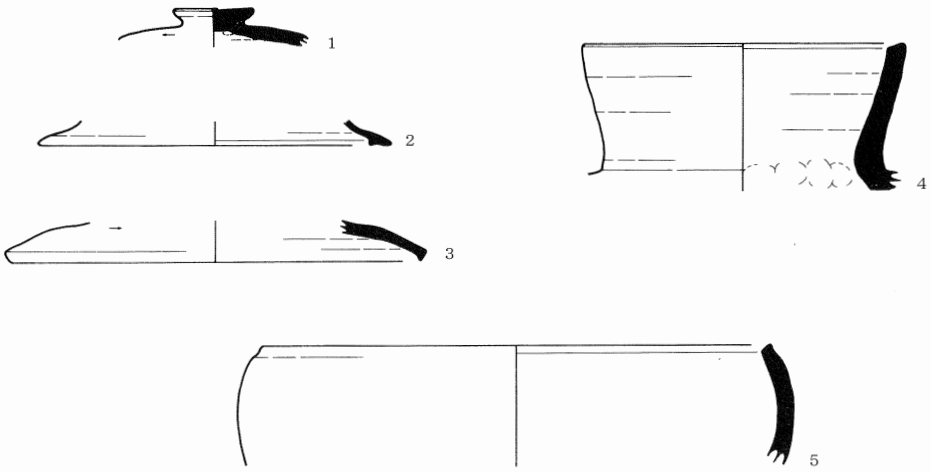




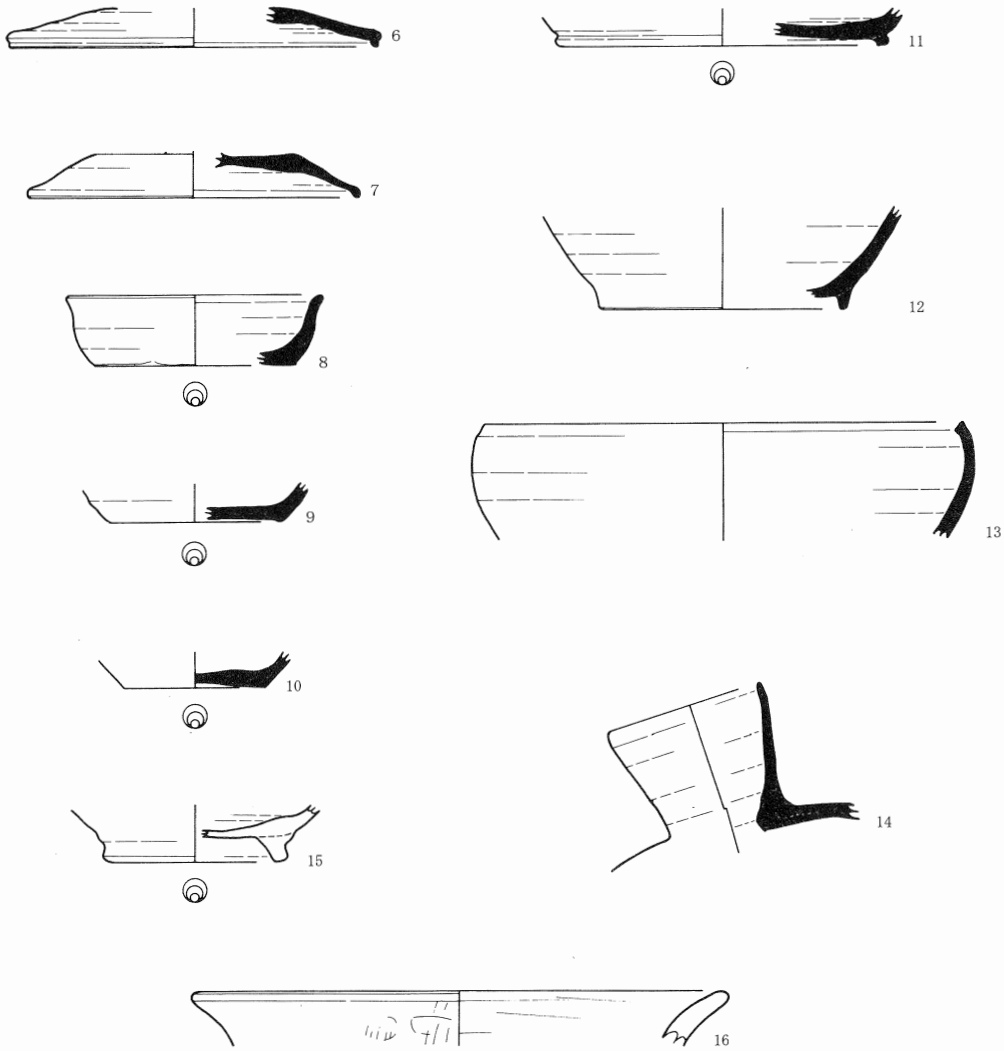


0　　4 m

第6図　金堂、講堂土層断面図（S＝1：50）



金堂出土遺物



講堂出土遺物

0　10cm

第７図　平成18年度調査出土遺物実測図（Ｓ＝１：３）

平成18年度調査　出土遺物観察表

（　）復元値　〈　〉推定値

挿図番号	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	形態・手法の特徴	胎土	焼成	色調	残存状況	備考	遺物登録番号
1	蓋	つまみ径3.0	－	－	天井部ヘラ削り後横ナデによるつまみ貼付。内面天井中心部ナデ。	1㎜以下の砂粒有	良好	淡灰色	つまみ1		102
2	蓋	〈13.8〉かえり径〈12.3〉	－	－	かえりは短く、断面三角形を呈す。	1㎜前後の砂粒有	良好	灰色	(口) 1/12		105
3	蓋	〈16.1〉	－	－	口縁端部は内方へ短く屈曲させる。体部はヘラケズリ。	1㎜以下の砂粒を含む	良好	淡灰色	(口端)一部		109
4	(口縁部)	〈12.6〉	－	－	直線的に外傾する頸部は口縁端部で内傾する面をもつ。頸部内面成形時の圧痕、以下叩き目痕。	1㎜前後の砂粒を多く含む5㎜大の砂礫有	良好	(内)オリーブ灰色 (外)暗灰色	(口) 1/11		112
5	鉢	〈20.0〉	－	－	体部から口縁部にかけて内湾、口縁端部は内傾して面をもつ。	1～2㎜の砂粒を含む	良	淡灰色	(口) 1/12		108
6	杯蓋	〈14.4〉	－	－	口縁部で屈曲、下方へ短くおさめる。	0.5㎜以下の砂粒を含む	やや不良	灰白色	(口) 1/12		130
7	杯蓋	〈13.0〉	－	－	平らな天井部から下り口縁部で屈曲、端部は丸くおさめる。つまみ貼付痕。天井部外面ヘラケズリ後外周部ナデ。	2～4㎜の砂粒有	良好	淡灰色	(口) 1/8	重ね焼き痕	134
8	杯	〈10.0〉	(8.0)	2.8	内湾する体部から口縁部で外反、端部は丸くおさめる。底部糸切り痕。	1㎜以下の砂粒を含む	やや不良	(内)灰黄色 (外)黄灰色	(口) 1/12 (底) 1/6	煤付着	116
9	(底部)	－	(6.7)	－	底部糸切り。	1㎜以下の砂粒を多く含む5㎜大の砂礫有	やや不良	(内)暗灰色 (外)灰色 灰白色	(底) 1/4		133
10	(底部)	－	(5.6)	－		0.5㎜以下の砂粒を多く含む	不良	淡黄色	(底) 1/3	黒斑有	132
11	(高台部)	－	〈12.8〉	－	底部内面ナデ。外面糸切り。底端部に短くハの字状の高台部貼付。	1㎜前後の砂粒有3㎜の砂粒有	良好	灰色	(底) 1/7		116
12	(高台部)	－	〈9.8〉	－	底端部貼付された高台部は直立、接地面を持つ。	1㎜以下の砂粒を多く含む3～4㎜の砂粒有	良好	灰色	(底) 1/8		116
13	鉢	〈18.8〉	－	－	体部から口縁部にかけて内湾、端部は内傾して面をもつ。	0.5㎜以下の砂粒を含む	良好	灰色 (外)一部暗灰色	(口) 1/8		131
14	平瓶(口縁部)	(6.1)	－	－	外傾する頸部は口縁部で上位に先細る。肩部円盤充填痕。	1㎜以下の砂粒を多く含む3㎜の砂粒有	良好	灰色	(口) 1/4		129
15	土師器(高台部)	－	6.4	－	底部糸切り後高台部貼付。ハの字状に開く高台部は内端部に接地面をもつ。	精緻。2㎜の砂粒有	良好	淡黄色	(底) 3/4	煤付着？	123
16	土師器(口縁部)	〈20.5〉	－	－	外反する口縁部は端部で丸くおさめる。	0.5㎜前後の砂粒を含む	良	淡橙褐色	(口) 1/10		120

第３節 平成19年度の調査

第１トレンチ（東塔）（第２・８・10・11図、巻頭図版４、図版15～17・21・22）

金堂から東塔までの地形および地層の連続性と、東塔の基壇及び塔背後の状況の観察を主眼においたＬ字形のトレンチである。金堂から東塔間は東塔周辺が金堂に比べて元々地形的に高い位置にあり、途中、水田の石垣および上部石組みされた用水路に分断されている。石垣および水路に使われた石は比較的大きなものが多く、金堂あるいは東塔の基壇石を転用した可能性が大きい。石の周辺はビニールやプラスチック片が露出しており構築時にかなり攪乱されているものと推察された。

トレンチの設定は、平成17年度調査で復元した中軸ライン金堂Ａ杭から直交するラインを設け、ＡＥ杭の復元と新たにＡ杭から東へ18m杭を設定、さらにそこから北へ直角に振って延長し、それを元にＬ字形のトレンチを設定した。Ｌ字形トレンチの西辺の西端は金堂東基壇石および犬走り状石敷きまで確認できるようにし、北辺は山裾部近くまで延ばした。トレンチの規模は西辺１m×14m、北辺１m×９m、面積23m²である。土層断面の観察は、金堂東西土層断面ラインに平行にＡ杭－ＡＥ杭ライン30cm南ラインＡ－Ａ'（西辺北壁面）と西辺南壁面、北辺の東壁面、北辺の北壁面で行った。なお、平成10年度基壇土を確認した第14トレンチは第１トレンチから約１m南に位置する。

東塔心礎の根元表土は現状で標高242.3mを測り、保存のため再度埋められた金堂東基壇石位置の表土は標高241.6m、現状で70cmの比高差が認められる。

用水路より東側の東塔周辺では、表土を除くと第２層旧耕作土が広がり、さらに下層に第３層黄褐色粘質土の床土が広がる。その直下で硬く締まった基壇土が検出された。基壇土は僅かに西側へ傾きをもつもののほぼ平坦に積まれ、基壇土上位は厚さ７cm程度の互層となって特に第５～11層は硬く締まる。第12層は上位より締まりがやや甘く、第13層は締まり弱く炭片や土器細片を含み全体に混じった土である。また、下位の第14～16層は締まり具合や礫の含みなどから堆積土と考えられ、東塔の基盤層である。特に15、16層は硬く締まって円礫がみられ第16層は円礫の含みが多い。現状で塔心礎の中心から西側基壇基部まで3.65m、北側基壇基部まで4.35mを測り、基壇土上面は標高242.16m、西側基壇基部で241.71m、北側基壇基部で241.67mを測り、基壇の高さ45cmが確認された。心礎が現状程度に埋まっていたと過程すると基壇の高さは74cm程度が復元される。また、西辺の基壇外縁基底部に80×70cm大および20cm大程度の自然石が横位に出土し、北辺でも同じく基壇外縁基底部に65×50cm大の自然石が検出された。いずれも基壇を構築する際最初の段階に盛土される第13層中に納まり、基壇範囲を示す目印的な石であった可能性が考えられる。基壇の外側の第26～30層、第19～25層については平坦面拡張のための埋め立てられた盛り土とも思われるが層の乱れがみられずほぼ平坦な層となっている。

西辺の中央には水田の石垣および用水路構築のための幾度となく掘削された痕跡があり、そこから西側の下段では表土や耕作土間に何層か観察されるものの第３層床土が標高241.1m付近で広がり、東塔周辺のそれとは約80cmの比高差が認められる。第３層下は第32層、第33層、その下層に上面に強い褐色の沈着があり硬く締まる第34層暗褐色粘質土が広がり、平成18年度で観察された金堂東西トレンチ土層断面と同様な（第32層、第33層、第34層が平成18年度ではそれぞれ第３層、第４層、第９層に対応する）層序である。この第34層上面で金堂の犬走り状石敷きや倒された基壇石が検出されている。この第34層はＡ－Ａ'断面ではほぼ標高241.25m前後で東へ広がるが、残念ながら攪乱のためなのか東塔基壇近くでは観察されず繋がりが確認できなかった。第34層下の第35層褐色粘質シルトは砂質で締まり弱く土器細片を含み、その下位は河原石が多く検出されることから、造成土的な土であったとみられ、東塔近くまで観察される。なお、この層は金堂南東端トレンチ（図版11下）や金堂北辺の犬走り状石敷きの北側断面でも同様な層が確認されている。

北辺では山裾側に西辺の用水路と繋がる石を多く含む溝が検出されており、その下層に東塔基壇の基盤層にあたる第14、15層がみられる。この第14層上面でく字形甕が出土しており、攪乱された溝埋土か

らも破片が多く出土している。東塔背後の山裾に何らかの遺構がある可能性もあり、注意が必要な一帯と思われる。

第１トレンチからは上記以外に、基壇土中、基壇外の土、用水路攪乱土中、第34、35層中などから土器が出土しており、多くは細片である。比較的遺存状態の良い(１)～(11)について図化を行った。(１)は第３層周辺、(２)はトレンチ北辺第24層、(３)は基壇土第12層もしくは第13層、(４)は基壇土第９～13層、(５)～(７)はトレンチ西辺の用水路攪乱土中、(８)(９)はトレンチ北辺北壁、(10)はトレンチ西辺第34層もしくは第35層中、(11)はトレンチ北辺東壁基壇土第12層中の出土である。須恵器蓋(１)～(４)は各種形態があり、基壇土中の遺物でも時期幅がみられる。く字形の土師器甕(７)～(９)は口縁部が湾曲しながら外反し、外面はハケ目、内面は口縁部ハケ目で頸部以下右上方向のヘラ削りする大きさも調整もほぼ同様なタイプである。(８)は器壁薄く(９)はやや厚手である。竈(10)(11)は比較的器壁が薄く焼成も良好である。

第２トレンチ（第２・９・11図、図版18・22）

講堂の北西10mの地形的にやや講堂より高い段状の旧水田部に設定したトレンチである。平成13年度の第24～26トレンチで確認された南北に延びる溝状遺構の北延長東７mにあたり、後世に災害で流されたラインのすぐ東側にもあたる。周辺は西側へいく程規模の大きな自然石が点在し、第２トレンチの北西脇すぐにも人力では移動が困難と思われる巨石が露出していた。段を成す石垣部分を含めて南北方向に長軸を設定し、トレンチ規模は２×10m、面積20㎡である。土層断面の観察は北壁面、東壁面、南壁面で行った。トレンチ掘り下げ前の標高は、北側の上段で242.1m、南側の下段で241.5mを測り、段差は60㎝である。

上段、下段ともに表土、耕作土を除くと第３層黄褐色粘質土の床土がほぼ水平に広がり、上段ではその床土を切る形で南側へ土を盛って平坦面を拡張し、端面に石垣を構築している。上段の床土下の第４、11層は水田整備前の造成土とみられる。床土下は河原石が露出し第５層暗褐色粘質土は上面に褐色の強い沈着がみられたことから、沈着部分を除去して精査を行ったがこの面で遺構は検出されなかった。その下層に攪乱穴状の第８～10層があるが第７層灰褐色シルトは大小の河原石を含むよく締まった地盤である。下段は第５層と第７層間に第６層灰褐色シルトが南端では黄褐色土ブロックを含む第19、20層にかわる。

遺物は上段第５層石間で須恵器片が３点と整地土とみられる第12層で土師器細片１点が出土している。このうち比較的図化可能な口縁部(12)を図化した。盤の杯部で口径18.6㎝、口縁端部は外反してわずかに屈曲し丸く納める。体部外面はヘラ削り後ナデ調整である。

第２トレンチは地形的に元々河原であり、後世に埋め立てて水田に利用してはいるが耕作土は薄く石も各所に露出するなど必ずしも条件の良い耕作地であったと言えない。今回遺構は検出されなかったが、河原が埋まった層から遺物が出土していることもあり、今後少なからず注意が必要である。

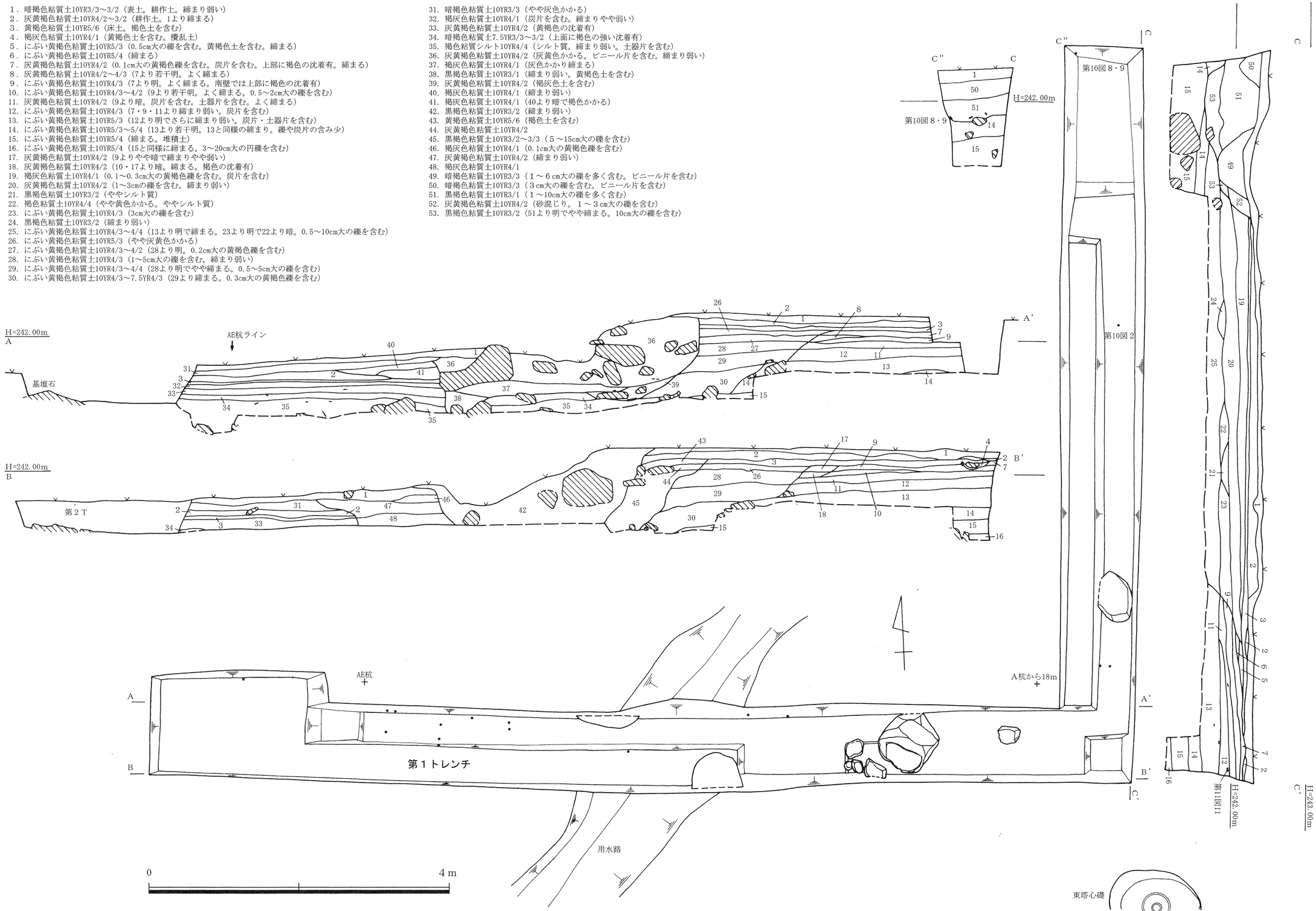
第３トレンチ（第２・９図、図版19）

南塔の南西約30mの、栃本廃寺が展開する微高地が南西に張り出す旧水田部に設定したトレンチである。大石川から約13m離れる。東側に水田の石垣が走り、この石垣に平行に長軸を南北方向に設定した。現状では６、７mほどに伸びた漆の木の北側にあたる。トレンチ規模は２×５m、面積10㎡である。土層断面の観察は北壁面、東壁面、南壁面で行った。トレンチ掘り下げ前の標高は238.8mである。

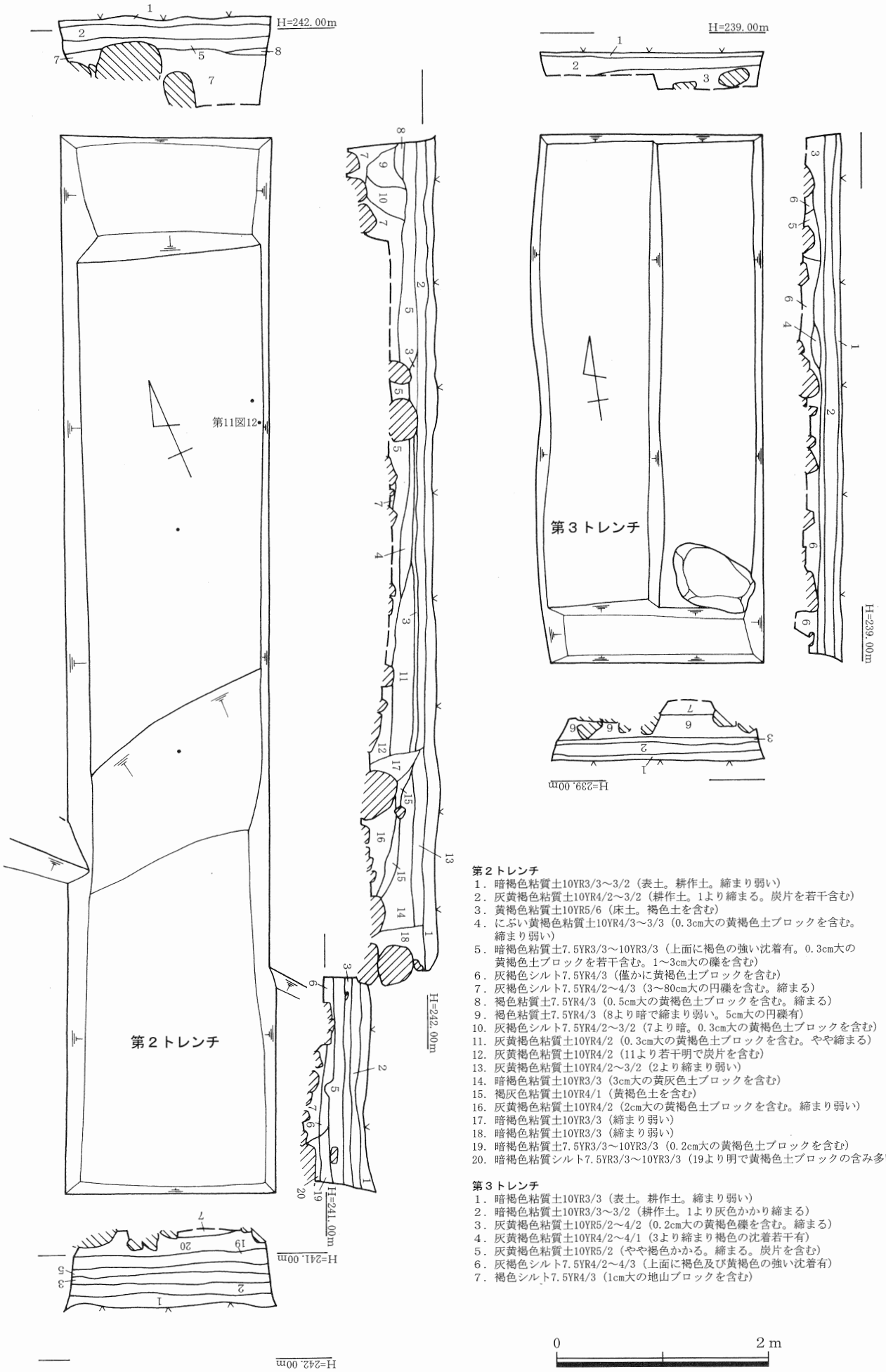
表土、耕作土を除去すると、第１、２トレンチ同様に第３層灰黄褐色粘質土の床土が広がり、その下層は部分的に第４層や攪乱とみられる第５層がみられるが、上面に褐色および黄褐色の強い沈着の有る第６層灰褐色シルトが確認される。そのさらに下層第７層はさらに砂質の褐色シルトである。床土下は河原石が密集し、南端の深掘部では一抱え以上の巨石が確認される。

遺物や遺構は検出されず、地形的にも河原であったと考えられる。

1．暗褐色粘質土10YR3/3～3/2（表土。耕作土。締まり弱い）
2．灰黄褐色粘質土10YR4/2～3/2（耕作土。1より締まる）
3．黄褐色粘質土10YR5/6（床土。褐色土を含む）
4．褐灰色粘質土10YR4/1（黄褐色土を含む。攪乱土）
5．にぶい黄褐色粘質土10YR5/3（0.5cm大の礫を含む。黄褐色土を含む。締まる）
6．にぶい黄褐色粘質土10YR5/4（締まる）
7．灰黄褐色粘質土10YR4/2（0.1cm大の黄褐色礫を含む。炭片を含む。上部に褐色の沈着有。締まる）
8．灰黄褐色粘質土10YR4/2～4/3（7より若干明。よく締まる）
9．にぶい黄褐色粘質土10YR4/3（7より明。よく締まる。南壁では上部に褐色の沈着有）
10．にぶい黄褐色粘質土10YR4/3～4/2（9より若干明。よく締まる。0.5～2cm大の礫を含む）
11．灰黄褐色粘質土10YR4/2（9より暗。炭片を含む。土器片を含む。よく締まる）
12．にぶい黄褐色粘質土10YR4/3（7・9・11より締まり弱い。炭片を含む）
13．にぶい黄褐色粘質土10YR5/3（12より明でさらに締まり弱い。炭片・土器片を含む）
14．にぶい黄褐色粘質土10YR5/3～5/4（13より若干明。13と同様の締まり。礫や炭片の含み少）
15．にぶい黄褐色粘質土10YR5/4（締まる。堆積土）
16．にぶい黄褐色粘質土10YR5/4（15と同様に締まる。3～20cm大の円礫を含む）
17．灰黄褐色粘質土10YR4/2（9よりやや暗で締まりやや弱い）
18．灰黄褐色粘質土10YR4/2（10・17より暗。締まる。褐色の沈着有）
19．褐灰色粘質土10YR4/1（0.1～0.3cm大の黄褐色礫を含む。炭片を含む）
20．灰黄褐色粘質土10YR4/2（1～3cmの礫を含む。締まり弱い）
21．黒褐色粘質土10YR3/2（ややシルト質）
22．褐色粘質土10YR4/4（やや黄色かかる。ややシルト質）
23．にぶい黄褐色粘質土10YR4/3（3cm大の礫を含む）
24．黒褐色粘質土10YR3/2（締まり弱い）
25．にぶい黄褐色粘質土10YR4/3～4/4（13より明で締まる。23より明で22より暗。0.5～10cm大の礫を含む）
26．にぶい黄褐色粘質土10YR5/3（やや灰黄色かかる）
27．にぶい黄褐色粘質土10YR4/3～4/2（28より明。0.2cm大の黄褐色礫を含む）
28．にぶい黄褐色粘質土10YR4/3（1～5cm大の礫を含む。締まり弱い）
29．にぶい黄褐色粘質土10YR4/3～4/4（28より明でやや締まる。0.5～5cm大の礫を含む）
30．にぶい黄褐色粘質土10YR4/3～7.5YR4/3（29より締まる。0.3cm大の黄褐色礫を含む）
31．暗褐色粘質土10YR3/3（やや灰色かかる）
32．褐灰色粘質土10YR4/1（炭片を含む。締まりやや弱い）
33．灰黄褐色粘質土10YR4/2（黄褐色の沈着有）
34．暗褐色粘質土7.5YR3/3～3/2（上面に褐色の強い沈着有）
35．褐色粘質シルト10YR4/4（シルト質。締まり弱い。土器片を含む）
36．灰黄褐色粘質土10YR4/2（灰黄色かかる。ビニール片を含む。締まり弱い）
37．褐灰色粘質土10YR4/1（灰色かかり締まる）
38．黒褐色粘質土10YR3/1（締まり弱い。黄褐色土を含む）
39．灰黄褐色粘質土10YR4/2（褐灰色土を含む）
40．褐灰色粘質土10YR4/1（締まり弱い）
41．褐灰色粘質土10YR4/1（40より暗で褐色かかる）
42．黒褐色粘質土10YR3/2（締まり弱い）
43．黄褐色粘質土10YR5/6（褐色土を含む）
44．灰黄褐色粘質土10YR4/2
45．黒褐色粘質土10YR3/2～3/3（5～15cm大の礫を含む）
46．褐灰色粘質土10YR4/1（0.1cm大の黄褐色礫を含む）
47．灰黄褐色粘質土10YR4/2（締まり弱い）
48．褐灰色粘質土10YR4/1
49．暗褐色粘質土10YR3/3（1～6cm大の礫を多く含む。ビニール片を含む）
50．暗褐色粘質土10YR3/3（3cm大の礫を含む。ビニール片を含む）
51．黒褐色粘質土10YR3/1（1～10cm大の礫を多く含む）
52．灰黄褐色粘質土10YR4/2（砂混じり。1～3cm大の礫を含む）
53．黒褐色粘質土10YR3/2（51より明でやや締まる。10cm大の礫を含む）



第8図　平成19年度第1トレンチ実測図（S＝1：50）



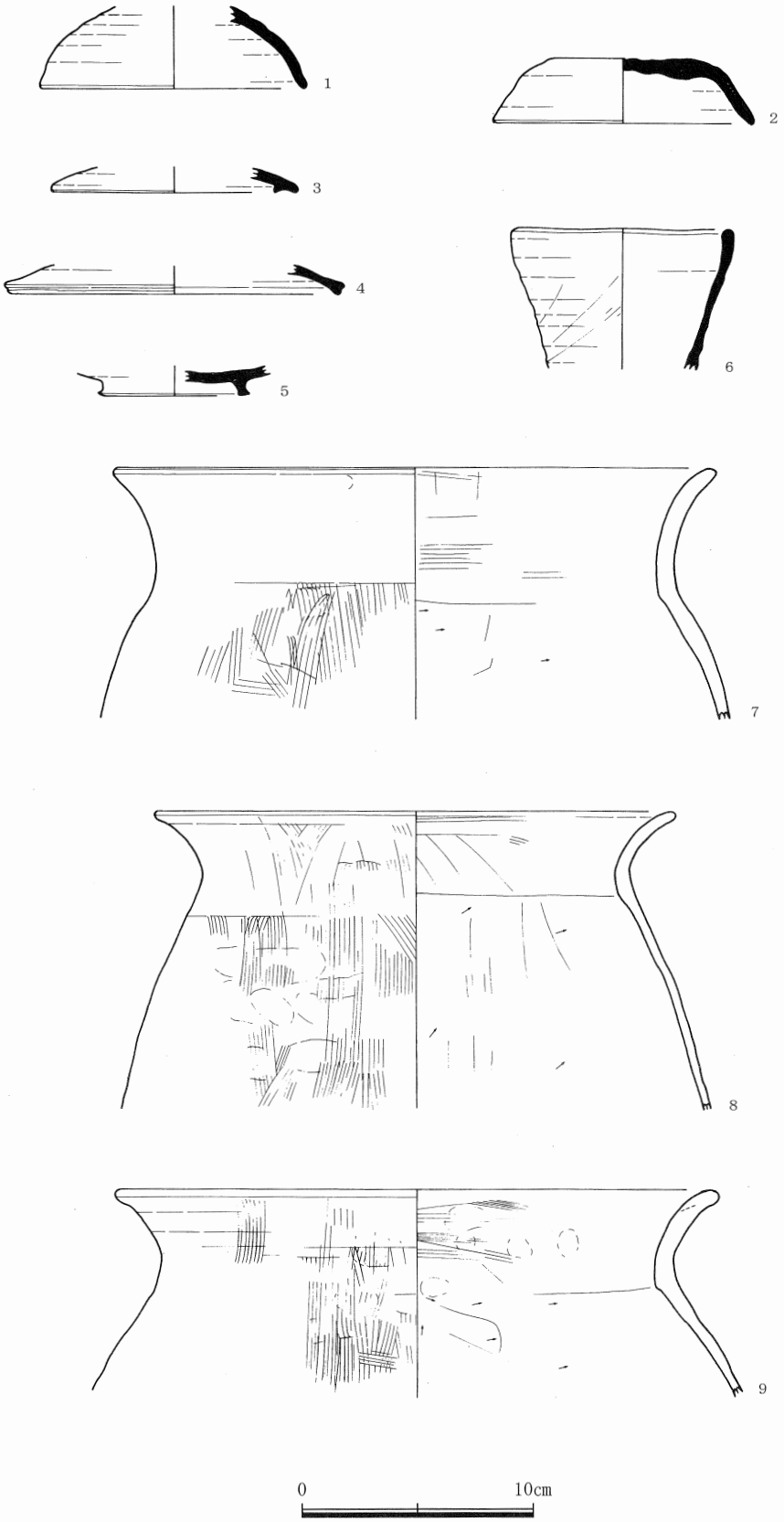
第２トレンチ

1．暗褐色粘質土10YR3/3～3/2（表土。耕作土。締まり弱い）
2．灰黄褐色粘質土10YR4/2～3/2（耕作土。1より締まる。炭片を若干含む）
3．黄褐色粘質土10YR5/6（床土。褐色土を含む）
4．にぶい黄褐色粘質土10YR4/3～3/3（0.3cm大の黄褐色土ブロックを含む。締まり弱い）
5．暗褐色粘質土7.5YR3/3～10YR3/3（上面に褐色の強い沈着有。0.3cm大の黄褐色土ブロックを若干含む。1～3cm大の礫を含む）
6．灰褐色シルト7.5YR4/3（僅かに黄褐色土ブロックを含む）
7．灰褐色シルト7.5YR4/2～4/3（3～80cm大の円礫を含む。締まる）
8．褐色粘質土7.5YR4/3（0.5cm大の黄褐色土ブロックを含む。締まる）
9．褐色粘質土7.5YR4/3（8より暗で締まり弱い。5cm大の円礫有）
10．灰褐色シルト7.5YR4/2～3/2（7より暗。0.3cm大の黄褐色土ブロックを含む）
11．灰黄褐色粘質土10YR4/2（0.3cm大の黄褐色土ブロックを含む。やや締まる）
12．灰黄褐色粘質土10YR4/2（11より若干明で炭片を含む）
13．灰黄褐色粘質土10YR4/2～3/2（2より締まり弱い）
14．暗褐色粘質土10YR3/3（3cm大の黄灰色土ブロックを含む）
15．褐灰色粘質土10YR4/1（黄褐色土を含む）
16．灰黄褐色粘質土10YR4/2（2cm大の黄褐色土ブロックを含む。締まり弱い）
17．暗褐色粘質土10YR3/3（締まり弱い）
18．暗褐色粘質土10YR3/3（締まり弱い）
19．暗褐色粘質土7.5YR3/3～10YR3/3（0.2cm大の黄褐色土ブロックを含む）
20．暗褐色粘質シルト7.5YR3/3～10YR3/3（19より明で黄褐色土ブロックの含み多い）

第３トレンチ

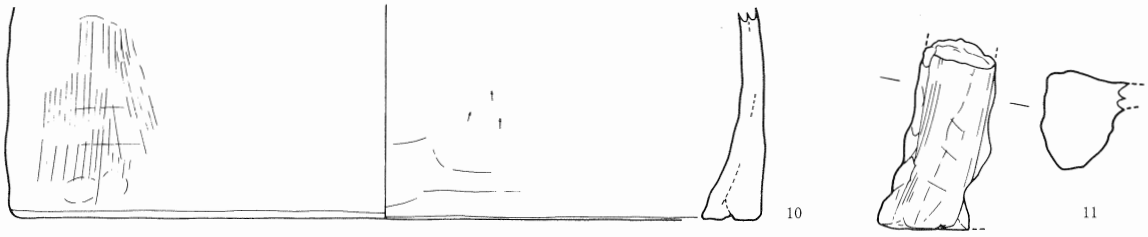
1．暗褐色粘質土10YR3/3（表土。耕作土。締まり弱い）
2．暗褐色粘質土10YR3/3～3/2（耕作土。1より灰色かかり締まる）
3．灰黄褐色粘質土10YR5/2～4/2（0.2cm大の黄褐色礫を含む。締まる）
4．灰黄褐色粘質土10YR4/2～4/1（3より締まり褐色の沈着若干有）
5．灰黄褐色粘質土10YR5/2（やや褐色かかる。締まる。炭片を含む）
6．灰褐色シルト7.5YR4/2～4/3（上面に褐色及び黄褐色の強い沈着有）
7．褐色シルト7.5YR4/3（1cm大の地山ブロックを含む）

第９図　平成19年度第２、３トレンチ実測図（Ｓ＝１：50）

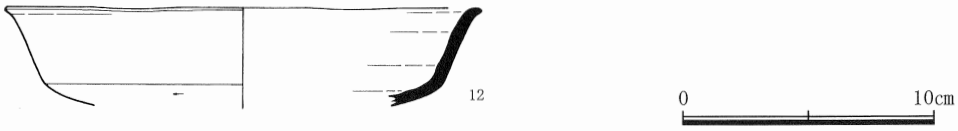


第１トレンチ　出土遺物

第10図　平成19年度調査出土遺物実測図（１）（Ｓ＝１：３）



第１トレンチ　出土遺物



第２トレンチ　出土遺物

第11図　平成19年度調査出土遺物実測図（２）（Ｓ＝１：３）

平成19年度調査　出土遺物観察表

（　）復元値　〈　〉推定値

挿図番号	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	形態・手法の特徴	胎土	焼成	色調	残存状況	備考	遺物登録番号
1	蓋	〈11.3〉	－	－		1～2㎜の砂粒を含む	良	灰色	(口) 1/10		3
2	蓋	－	－	－	平坦な天井部から外傾して口縁部に至る。口縁端部はごく僅かに欠。天井部外面ヘラ切り後ナデ。	1～3㎜の砂粒有	良好	灰色	(天) 1	自然釉	20 35
3	蓋	〈10.4〉 かえり径 〈8.7〉	－	－	かえりは短く断面三角形状を呈す。	1～2㎜の砂粒有	良	灰色	(口) 1/13		25
4	蓋	〈14.0〉	－	－	口縁端部は内傾、端面凹面状となる。	1㎜以下の砂粒を含む	良	灰色	(口) 1/13	自然釉	22
5	(底部)	－	(5.7)	－	ハの字状に開く高台は横ナデにより貼付。内端部に接地面をもつ。	1㎜前後の砂粒を含む	良	灰色	(底) 1/5		2
6	(口縁部)	〈8.5〉	－	－	頸部は外傾、口縁部で上位に丸くおさめる。頸部外面捩り痕。	1㎜以下の砂粒を多く含む	良	灰色	(口) 1/7		15
7	土師器甕	〈25.4〉	－	－	口頸部外反、端部は丸くおさめる。外面縦ハケ目調整後頸部横位のナデ。内面頸部以下丁寧なヘラケズリ。	1～2㎜の砂粒有	良	淡橙褐色 褐色	(口) 1/12	煤付着 黒斑有	15
8	土師器甕	(21.9)	－	－		1～2㎜の砂粒を含む3㎜大の砂粒有	良	淡橙褐色	(口) 1/ 6 (肩) 1/ 7	炭化物付着	34
9	土師器甕	〈25.0〉	－	－		2㎜前後の砂粒有	やや不良	淡黄褐色	(口) 1/16 (頸) 1/10	煤付着 黒斑有	34
10	竈	－	〈29.6〉	－	基底部。外面縦位ハケ目。内面ヘラケズリ、基部横位のナデ。	2㎜前後の砂粒を多く含む4㎜大の砂礫有	良	淡橙褐色	(底) 一部		13
11	竈(焚口部)	－	－	－	基底部。指成形後ナデ。廂に沿ったナデ、ハケ目調整。	1～2㎜前後の砂粒を多く含む	良	褐色 灰褐色			52
12	盤(杯部)	〈18.6〉	－	－	杯部。体部で稜を成して屈曲、口縁部は端部で外反、丸くおさめる。体部外面ヘラケズリ後ナデ。	0.5㎜前後の砂粒を多く含む2㎜大の砂粒有	良好	(内) 淡灰色 (外) 灰色	(口) 1/11		65

第４節　まとめ

平成17、18年度の調査で、これまで部分的にしか確認できなかった金堂および講堂の全体像がほぼ把握でき、金堂と講堂の位置や基壇の高さの関係など黙示的に捉えることができたことは大きな成果のひとつであったと思われる。

個別にみれば、金堂は南基壇の遺存状況は後世に倒されて上に石積みされるなど必ずしも当時の状況のままではないにせよ、南東および南西隅石が確認され南東隅にはさらに一石の石積みが遺存するとともに東側前面には犬走り状石敷きが検出され、金堂の風格がさらに高まったように感じられる。講堂は不明であった北辺および西辺の状況が明確となり、北辺は基壇石や犬走り状石敷きを設けず雨落ち溝状の溝状遺構の存在が明らかとなった。また、身舎の礎石とされる内列の礎石10個が完存し、裳階礎石とされる外列の礎石についても根石および根石痕跡を含めてほぼ遺存することが判明した。金堂および講堂土層断面の観察からも、元々河原地形であった場所を整地して造営されたことが窺える。

平成19年度の調査では、東塔の基壇土が45cm遺存していることが判明し、東塔と金堂との地形の連続性が捉えられた。東塔の基盤は金堂に比べ地形的に高くしっかりした堆積土の基盤のうえに建立されており、金堂から東塔へかけてほぼ平坦な遺構面が続き東塔近くでやや高さを増す地盤であったことが明らかとなった。

これらの調査で出土した遺物については目新しい遺物はなく細片が多いものの、金堂犬走り状石敷き間、講堂の礎石・根石間、東塔基壇土中と建物の建立時期の推定に供与可能な遺物もみられる。これまでの遺物の年代観を大きく変えるものはなく、講堂の礎石・根石に関わる出土遺物は８世紀前葉～中葉の年代であり、金堂、東塔に関わる遺物は７世紀後葉～８世紀前葉の時期と、総じて講堂の遺物が新しい特徴をもつ。金堂と講堂の関係についても、近接し軸をやや異とすることから建立の時期について諸説あるようであるが、土層断面からは金堂の後に講堂を建立したような状況は見出し難い。

栃本廃寺の性格や建立の背景などについては、これまでに記された考察がありここではそれ以上に触れる余地はないが、感覚的には、地方で寺院の造営が始まってまだ間もない時期に、標高242mの雪深い山間部の平地が比較的限定される中、地形的にまとまった日当たり良好な良地を確保し、寺院を建立した豪族に対し、この地域に対する並々ならぬ執着・愛着を感じざるを得ない。

いずれにせよ、栃本廃寺の全容解明には残された課題が多くあり、今後の地道な調査の積み重ねにより一つ一つ解明されていくことであろう。今回の調査結果がさらに検討され深化して、遺跡整備へ向けて反映されていくよう期待される。

主要参考文献

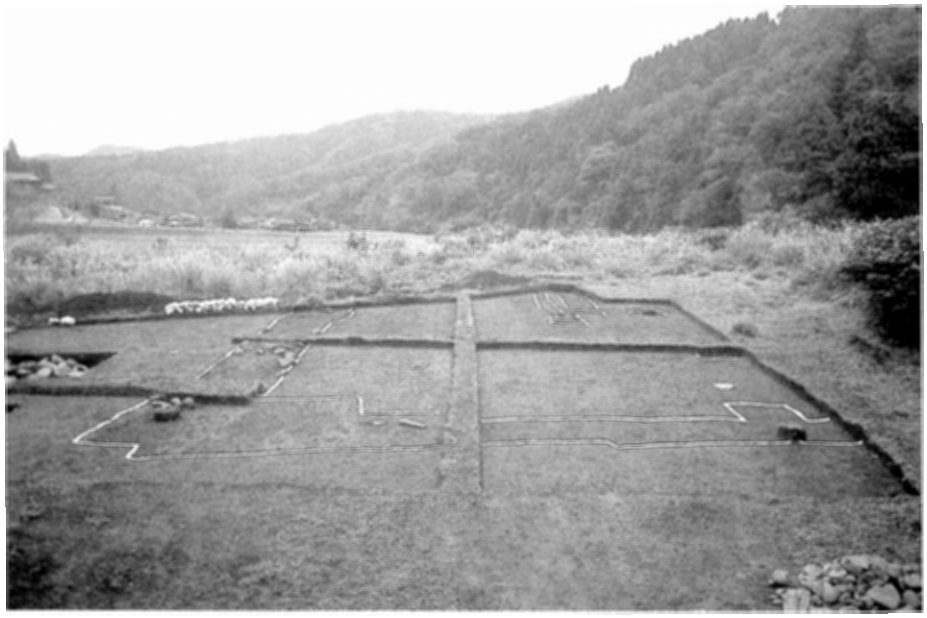
国府町教育委員会『史跡栃本廃寺塔跡発掘調査報告書』2000年

国府町教育委員会『史跡栃本廃寺塔跡Ⅱ・鳥取藩主池田家墓所』2003年

図　　版

図版 2

金堂既往調査トレンチ
検出状況
（東から）



講堂既往調査トレンチ
検出状況
（東から）

講堂身舎礎石検出状況
（南東から）

図版 3

講堂身舎礎石検出状況
（東から）

金堂～講堂間トレンチ
土層断面
（南西から）

冬季積雪状況
（南東から）

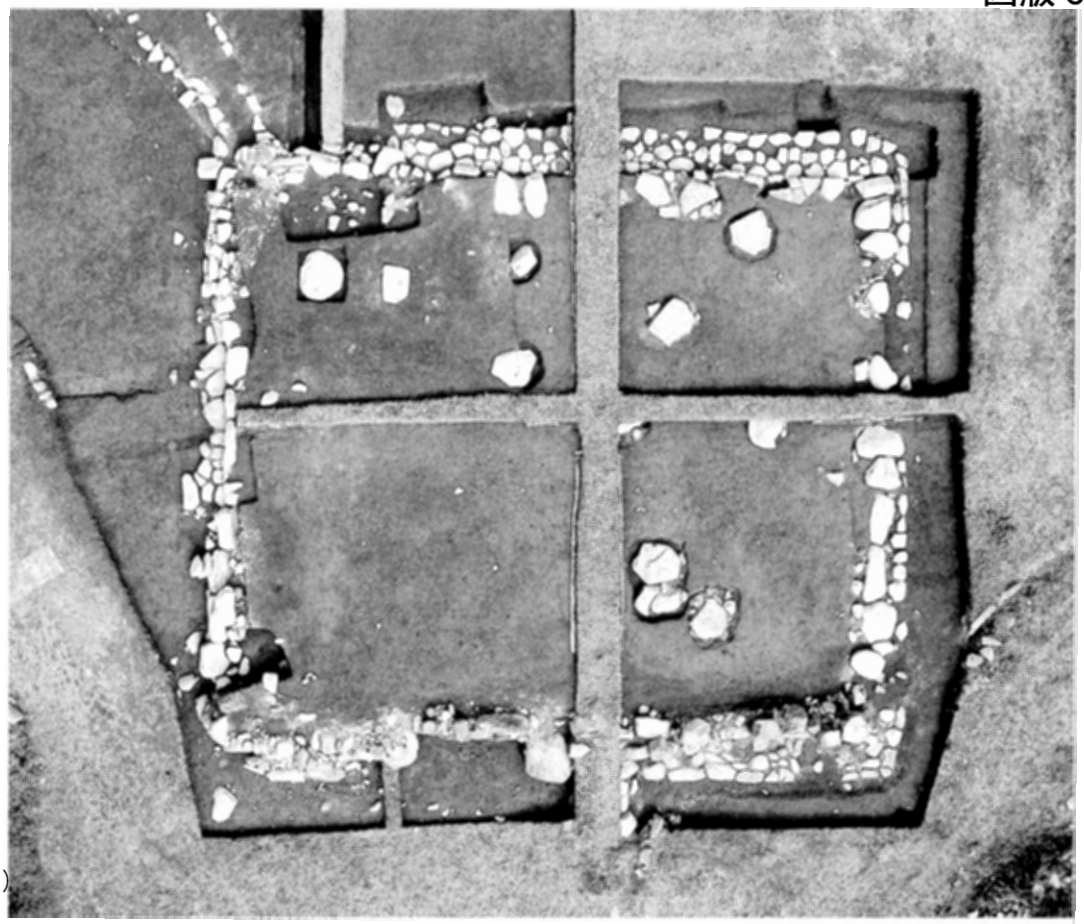
図版 4

平成18年度調査前
（南東から）

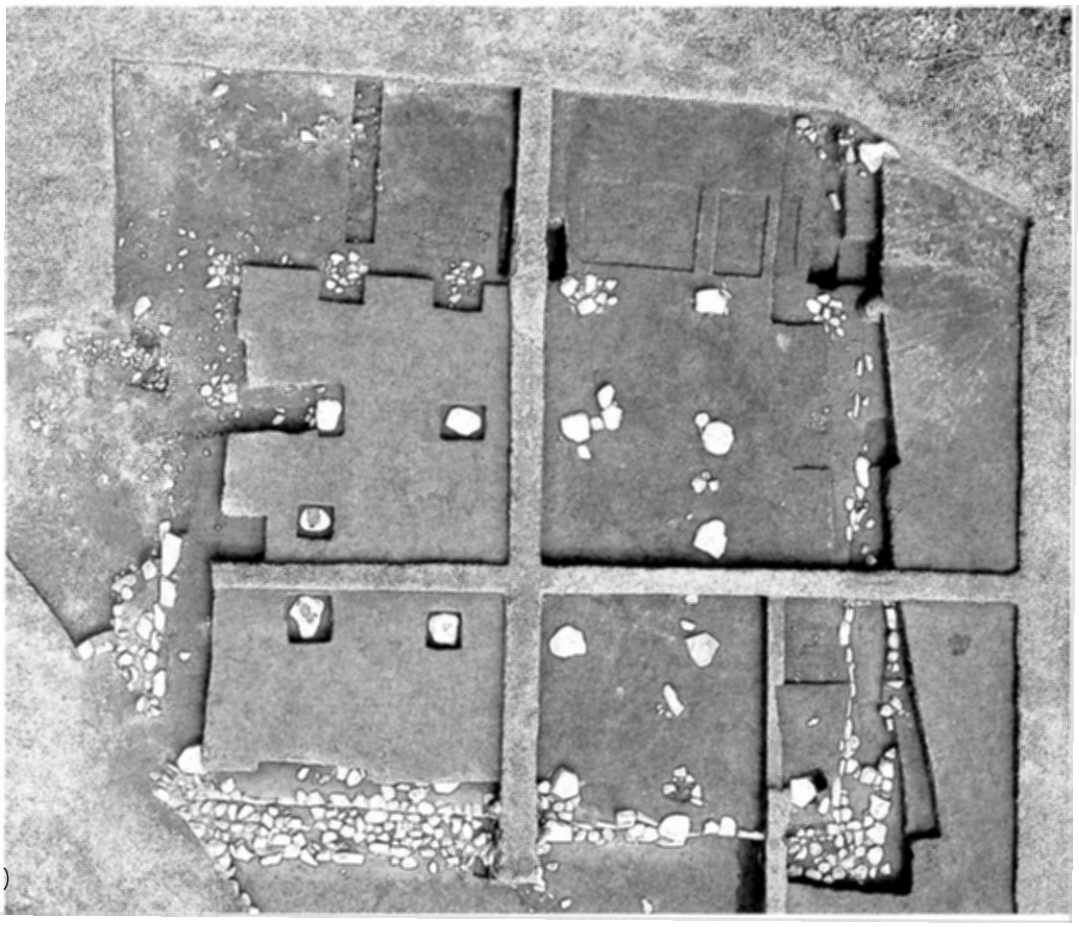
調査指導風景
（西から）

調査整備委員会
現地視察風景
（北西から）

図版 5



金堂全景
（南真上から）



講堂全景
（南真上から）

図版 6

金堂南基壇、犬走り状石敷き
検出状況
（東から）

金堂東基壇、犬走り状石敷き
検出状況
（北から）

金堂北基壇、犬走り状石敷き
検出状況
（東から）

金堂西基壇、犬走り状石敷き
検出状況
（南西から）

金堂南基壇東側
検出状況
（南から）

金堂南基壇西側
検出状況
（南から）

図版 8

講堂東基壇、犬走り状石敷き
検出状況
（南から）

講堂南基壇、犬走り状石敷き
西側検出状況
（南から）

講堂南基壇、犬走り状石敷き
検出状況
（西から）

講堂西基壇、犬走り状石敷き検出状況
（南から）

講堂北辺溝状遺構検出状況
（東から）

講堂北辺溝状遺構土層断面
（東から）

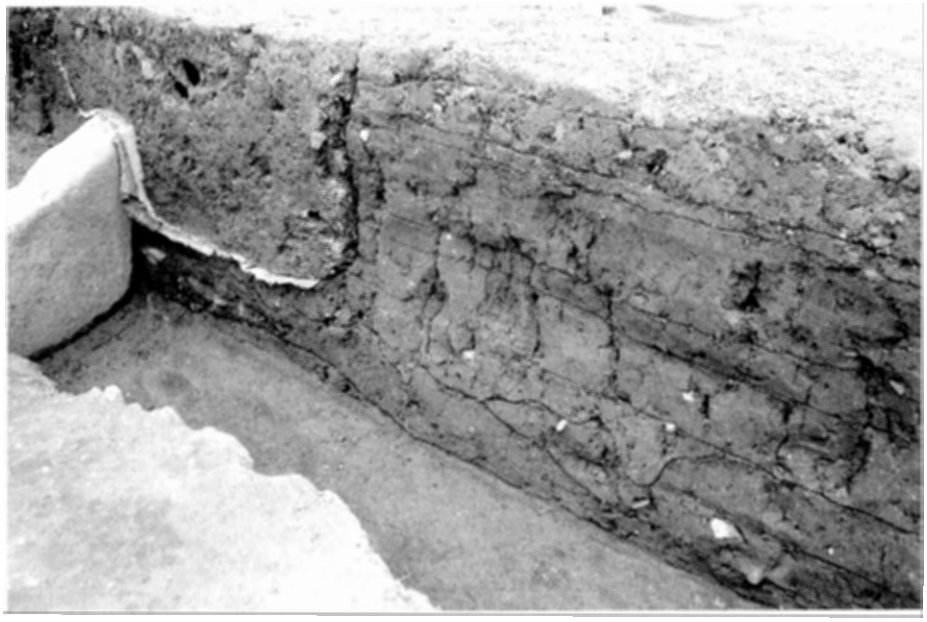
図版10

金堂東西土層断面
（南西から）

講堂東西南北土層断面
（北東から）

講堂東西土層断面西端部分
（北西から）

金堂～講堂間土層断面
（北西から）



金堂～講堂間土層断面講堂
南基壇部分
（南西から）

金堂南東端深掘部土層断面
（北から）

図版12

講堂Ｓ１検出状況（南から）

講堂Ｓ５検出状況（南から）

講堂Ｓ２検出状況（南から）

講堂Ｓ６検出状況（南東から）

講堂Ｓ３検出状況（南から）

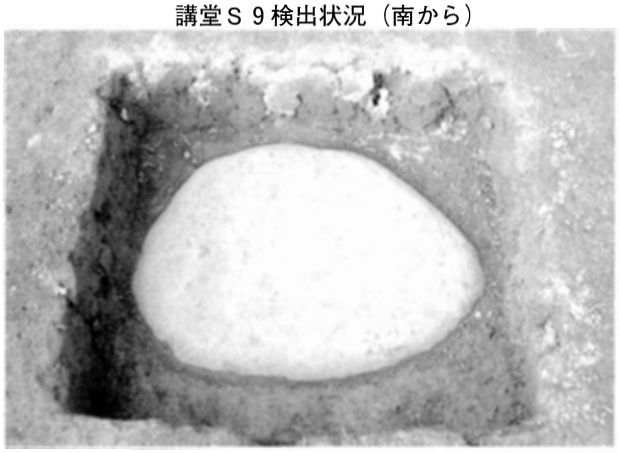
講堂Ｓ７検出状況（南から）

講堂Ｓ４検出状況（南から）

講堂Ｓ８検出状況（南から）

講堂Ｓ９検出状況（南から）

講堂Ｓ13検出状況（南から）



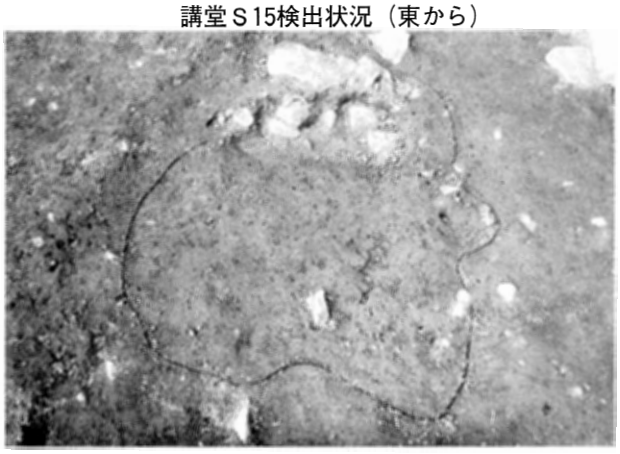
講堂Ｓ10検出状況（南から）

講堂Ｓ14検出状況（南から）

講堂Ｓ11検出状況（南から）

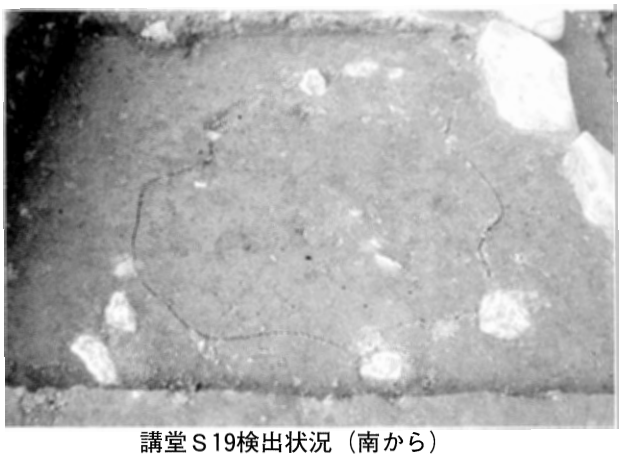
講堂Ｓ15検出状況（東から）

講堂Ｓ12検出状況（南から）

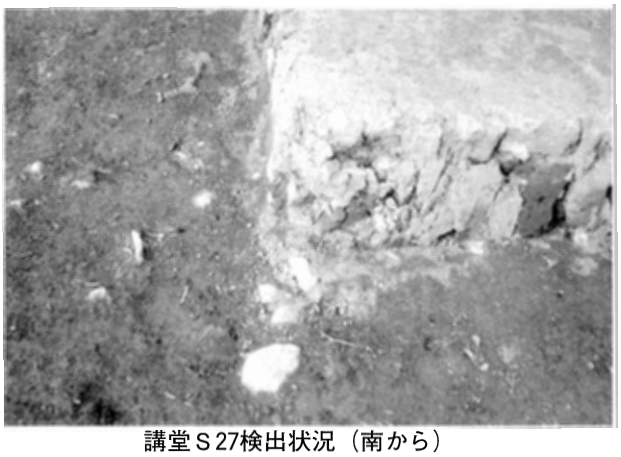


講堂Ｓ17検出状況（南から）

図版14



講堂Ｓ19検出状況（南から）



講堂Ｓ27検出状況（南から）

講堂Ｓ20検出状況（北西から）

講堂Ｓ28検出状況（南から）

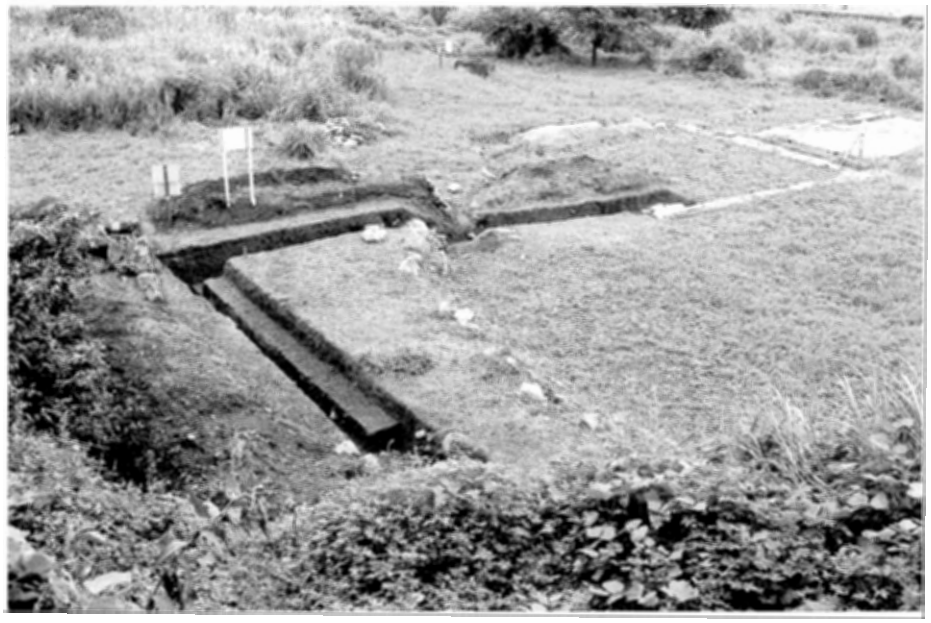
講堂Ｓ25検出状況（南から）

講堂Ｓ15礎石下遺物出土状況（東から）

講堂Ｓ26検出状況（南から）

講堂北辺整地層遺物出土状況（東から）

平成19年度第１トレンチ
設定状況
（北東から）



平成19年度第１トレンチ
掘下げ状況
（北東から）

平成19年度第１トレンチ
掘下げ状況
（西から）

図版16

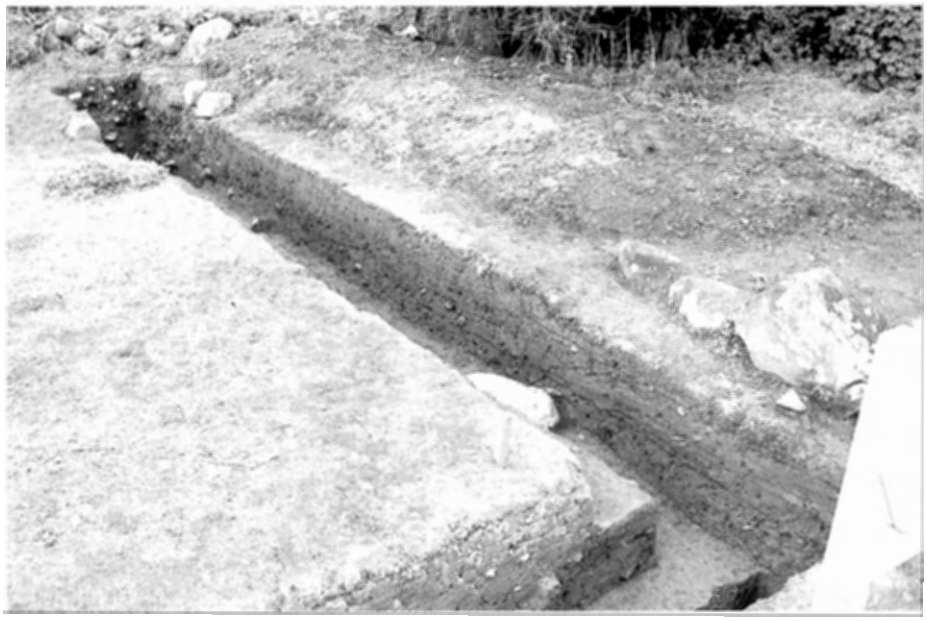
平成19年度第１トレンチ西辺掘下げ状況（東から）

平成19年度第１トレンチ北辺掘下げ状況（南から）

平成19年度第１トレンチ西辺石検出状況（西から）

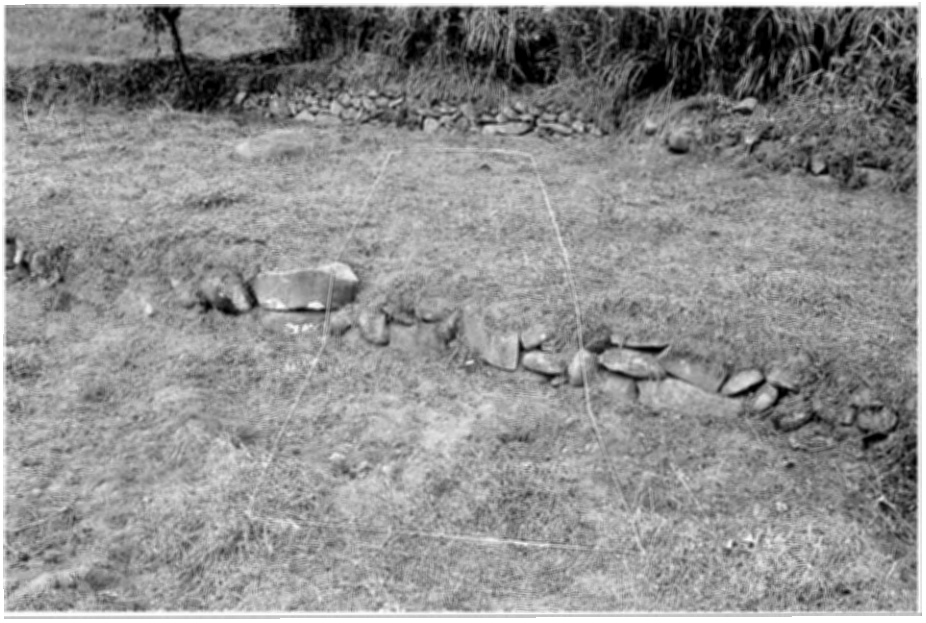
平成19年度第１トレンチ
西辺南壁断面
（北東から）

平成19年度第１トレンチ
西辺北壁断面
（南東から）



平成19年度第１トレンチ
北辺東壁断面
（南西から）

図版18

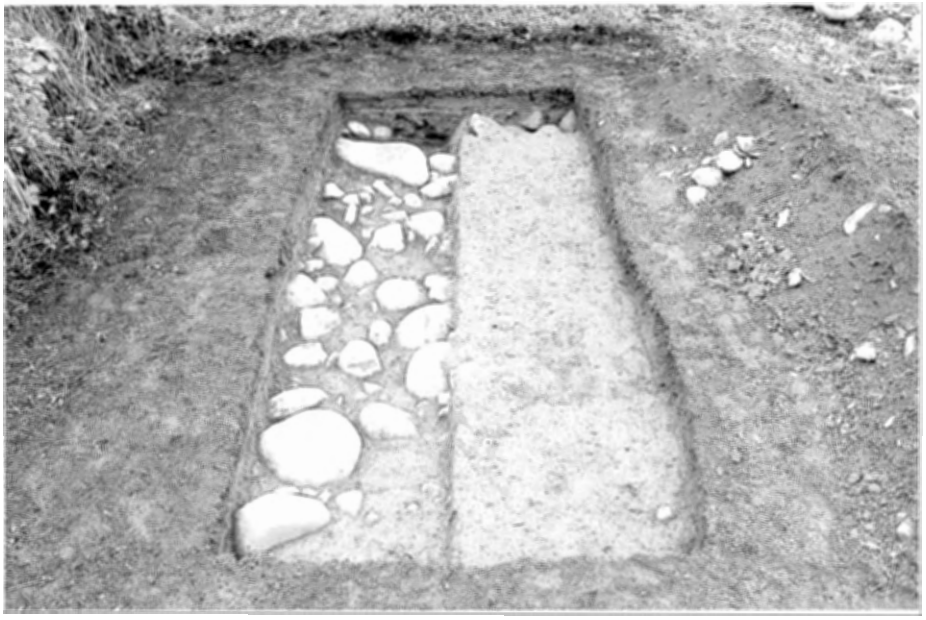


平成19年度第２トレンチ
設定状況
（南西から）

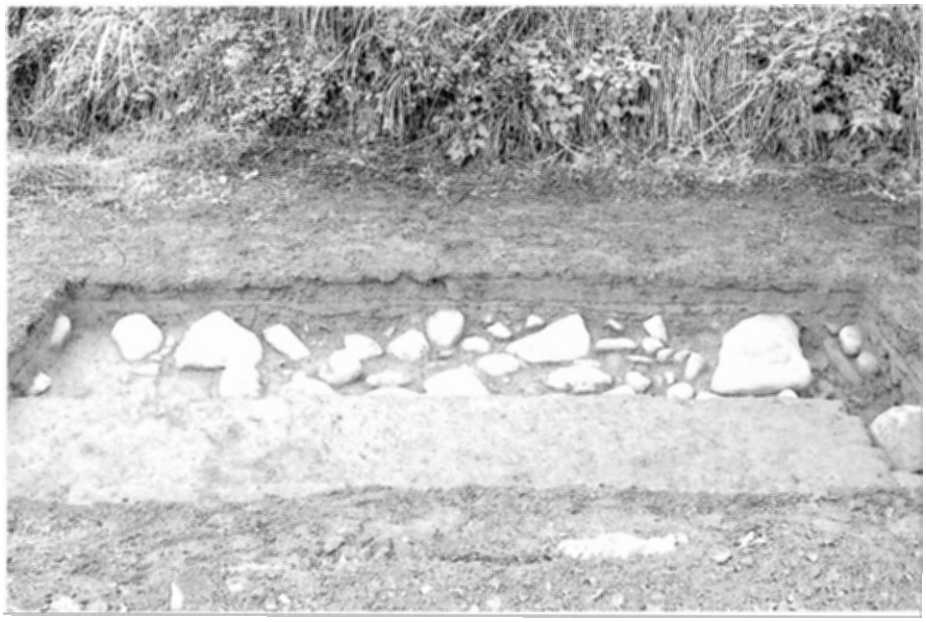
平成19年度第２トレンチ
掘下げ状況
（南西から）

平成19年度第２トレンチ
東壁断面
（南西から）

平成19年度第３トレンチ
設定状況
（北から）

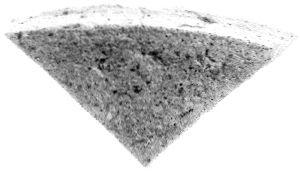


平成19年度第３トレンチ
掘下げ状況
（北から）

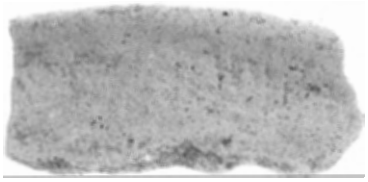


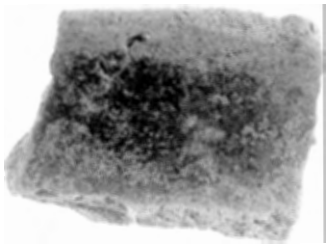
平成19年度第３トレンチ
東壁断面
（西から）

図版20



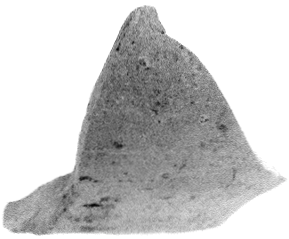
1





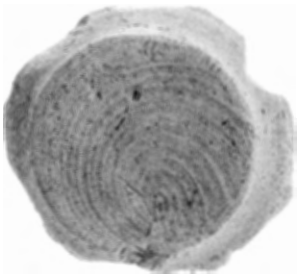
2・3

平成17年度　金堂～講堂間出土遺物



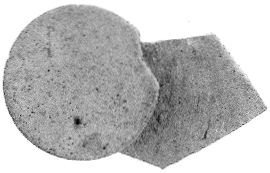
4

5



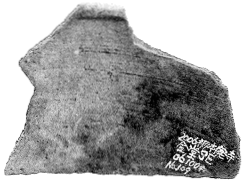
6

平成17年度　講堂出土遺物

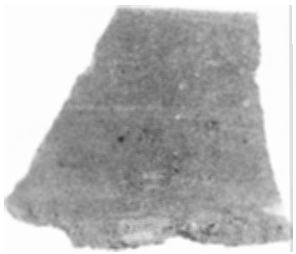


1

2

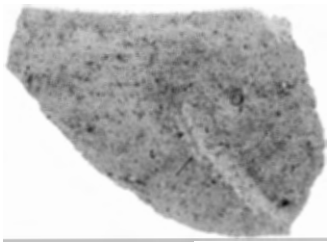


3

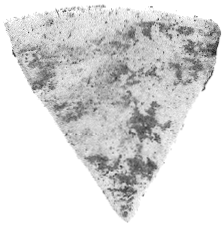


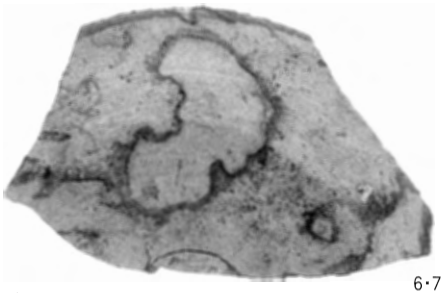
4

平成18年度　金堂出土遺物

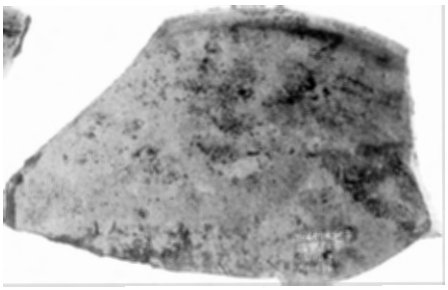


5

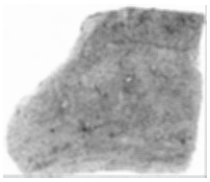


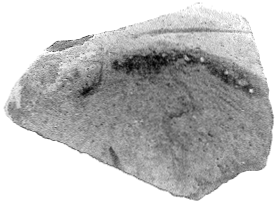


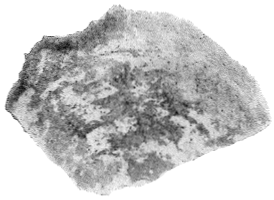
6・7

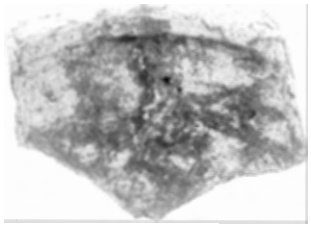


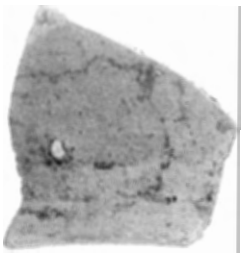
平成18年度　講堂出土遺物

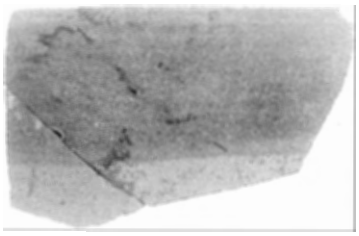

8

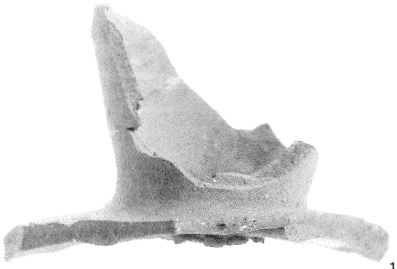

9

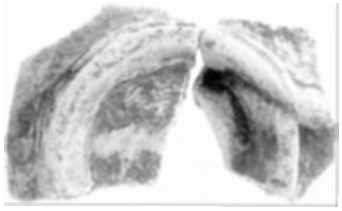

10

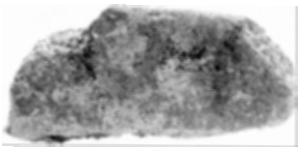

11


12

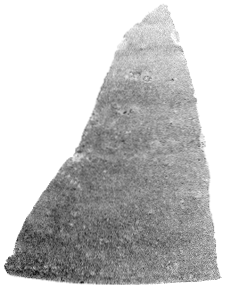

13

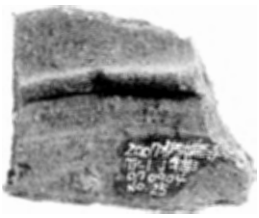

14

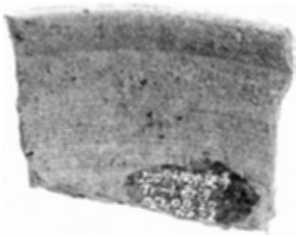

15


16

平成18年度　講堂出土遺物


1




3･4

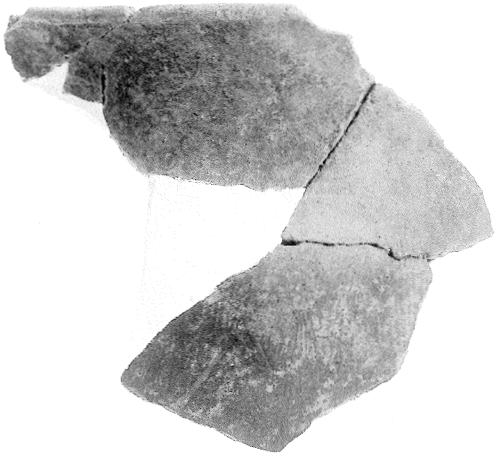
2

6

5

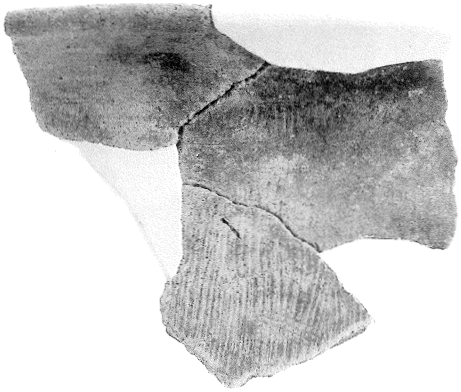
平成19年度　第１トレンチ出土遺物

図版22



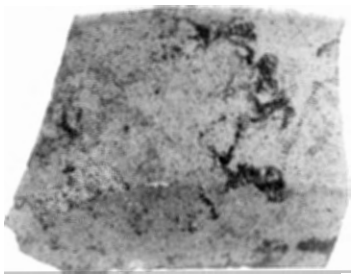
7

8



9

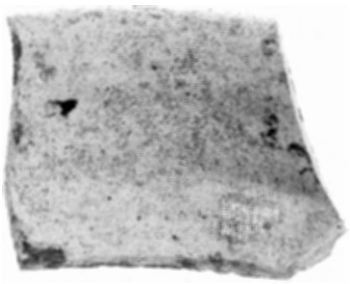
10



12

11

平成19年度　第１トレンチ出土遺物



平成19年度　第２トレンチ出土遺物

報告書抄録

ふりがな	しせき とちもとはい じ あとはっくつちょうさほうこくしょ
書名	史跡栃本廃寺跡発掘調査報告書
副書名	
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	加川 崇　谷口 恭子
編集機関	鳥取市教育委員会
所在地	〒680-8571 鳥取県鳥取市尚徳町116番地　TEL（0857）20-3367
発行年月日	西暦2008年（平成20年）3月26日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 （m²）	調査原因
		市町村	遺跡番号					
史跡栃本廃寺跡 （しせきとちもとはいじあと）	鳥取市 国府町 栃本 （とっとりし こくふちょう とちもと）	31201	2－0136	35° 28′ 05″	134° 17′ 35″	20051031 ～20051207	640	史跡整備に伴う事前調査
						20060829 ～20061017	186	
						20070809 ～20071128	53	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
史跡栃本廃寺跡	寺院	白鳳・奈良時代	金堂・講堂 東塔・南塔	土師器、須恵器 瓦質土器、陶磁器 置竈、縄文土器片	金堂の南と東に二塔を配する特殊な伽藍配置。 講堂北辺に溝状遺構。 講堂身舎礎石完存。

史跡栃本廃寺跡発掘調査報告書

平成20(2008)年3月発行

編集・発行　鳥取市教育委員会

印刷所　株式会社矢谷印刷所